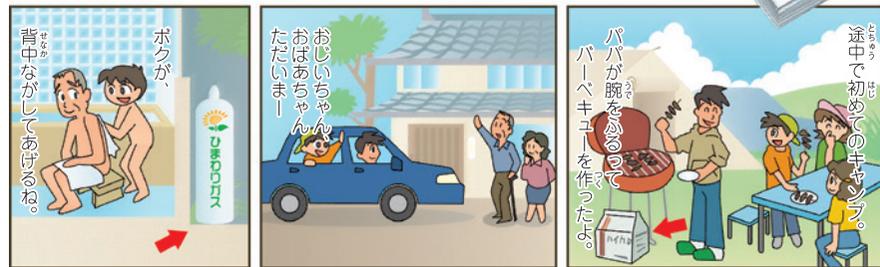
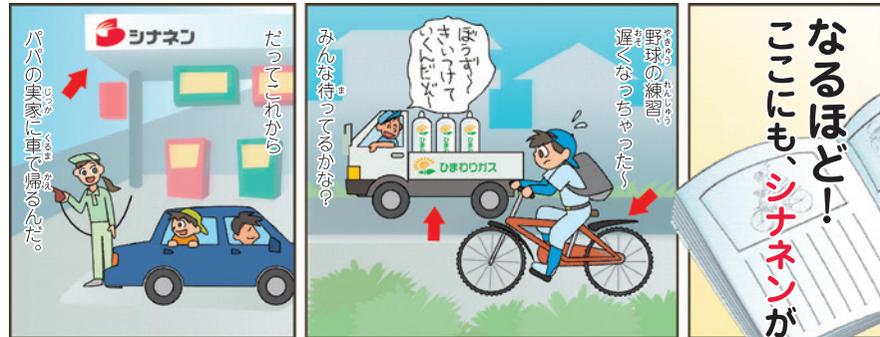


いつもありがとう

第4回作文コンクール入賞作品集 2010

選者 あさのあつこ / 尼子騷兵衛 / 森田正光 / 鈴木弘行 / 下高原拓



「いつもありがとう」作文コンクール共催企業



品川ハイネン株式会社

シナナングループ各社

いつもありがとう 第四回作文コンクール入賞作品集(2010) もくじ

最優秀賞

「ぼくとお父さんのおべんとうはこ」 片山 悠貴徳

シナネン賞

「父のおみやげ」 藤井 華純

朝日小学生新聞賞

「ぼくのお父さん」 藤近 宥祈

優秀賞

〈低学年の部3編〉

「ばあばとたからのしま」 野口 真凜

「お母さんありがとう」 星 悠大

「だきしめたくなる」 大橋 詠一

〈高学年の部3編〉

「おかえり」 細川 夕佳里

「ありがとうの山」 伊佐 碩恭

「小さなお母さん」 北 実怜

入選

〈低学年の部7編〉

「てんごくのおとうさんへ」

「ありがとうのしろいはな」

「もつちゃん」

「ありがとう お兄ちゃん」

「お母さんいつもありがとう」

「お母さんとぼくのせつめい書」

「おじいちゃんありがとう」

〈高学年の部7編〉

「いつもありがとう、おとうさん」

「お父さんとアイコンタクト」

「ありがとうおじいちゃん」

「おばあちゃんとの十二年」

「お母さんがお父さん」

「やさしい私のお姉ちゃんへ」

「長生きしてね：ひいばあちゃん」

佳作

〈低学年の部10編〉

「ぼくのまま、ありがとう」 古田 千尋

「ぼくはふかさくきょうのすけ」 深作 京之介

「おじいちゃんありがとう」 西 花菜

「だいすきなゆきちゃん」 堀 未佳

「父さん、ありがとう」 田中 大陸

「じいちゃん、ありがとう」 大野 泰雅

「おとうさんありがとう」 坪内 蘭丸

「いつもありがとう」 福浦 帆乃夏

「わたしの元気なおじいちゃん」 大町 彩菜

「パパの まほうの手」 真綱 安夕

〈高学年の部10編〉

「いつもありがとうお母さん」 上松 七海

「わたしのたから物」 山下 桃佳

「ぼくのお母さん」 波多野 希陽

「お父さん、今までごめんなさい」 藤井 悠

「見送り、ありがとう」 是永 一樹

「ひいおばあちゃん、ありがとう」 田名後 友

坂本 岳央

鈴木 愛渚

下口 輝晴

谷口 佳郁太

佐藤 宜之

谷口 拓海

加藤 愛理

岡田 涼子

小川 康伸

菊池 純

麻野 花紗

南俊 太郎

柴田 津菜

千葉 汐音

本田 聖鷹

松本 敦貴

小磯 日菜

上田 恭平

団体賞(5団体)

〔愛知県〕 扶桑町立柏森小学校

〔愛知県〕 扶桑町立扶桑東小学校

〔大阪府〕 大阪市立生野小学校

〔岐阜県〕 リード進学塾関校舎

〔京都府〕 ノートルダム学院小学校

選者あとがき……………50

あさのあつこ(作家)

尼子驥兵衛(漫画家)

森田正光(気象予報士)

鈴木弘行(シナネン株式会社代表取締役社長)

下高原拓(朝日小学生新聞)

主催…朝日小学生新聞社

共催…シナネングループ

後援…文部科学省 朝日新聞社

●応募総数三三、四二二作品の中から選ばれました。

「ぼくとお父さんのおべんとうばこ」

広島県広島市立中島小学校二年

片山 悠貴徳

おとうさんがびょうきでなくなつてから三年、ぼくは小学二年生になりました。

おとうさんにほうこくがあります。きつとみてくれているとおもうけど、ぼくはおとうさんのおべんとうばこをかりました。

ぼくは、きのうのことをおもいだすたびにむねがドキドキします。

ぼくのおべんとうばこはしがあつて、すてきなおとがきこえました。きのうのおべんとうばこは、とくべつでした。まだ十じだというのに、おべんとうのことはかりかんがえてしまいました。

なぜきのうのおべんとうがとくべつかというかと、それはおとうさんのおべんとうばこをはじめつかつたからです。おとうさんがいなくなつて、ぼくはとてもさみしくて、かなしかったです。

おとうさんのおしごとは、てんぶらやさんでした。おとうさんのあげたてんぶらはせかい「おいしかったです。ぼくがたべにいくと、いつもこつそり、ぼくだけにぼくの大きな工ビのてんぶらをたくさんあげてくれました。そんなとき、ぼくはなんだかぼくだけがとくべつなきがして、とてもうれしかったです。あれからたくさんたべて、空手もがんばつ

ているので、いままでつかつていたおべんとうばこではたりなくなつてきました。

「大きいおべんとうにしてほしい。」とぼくがいうと、おかあさんがたなのおくから、おとうさんがいつもしごとのときにもつていつていたおべんとうばこを出してきてくれました。

「ちよつとゆうくんには大きすぎるけど、たべられるかな。」といいました。

でも、ぼくはおとうさんのおべんとうばこをつかわせてもらうことになったのです。

そして、あさからまちにまつたおべんとうのじかん。ぼくはぜんぶたべることができました。たべたらなんだかおとうさんみたいに、つよくてやさしい人になれたきがして、おとうさんにあいたくなりました。いまおもいだしてもドキドキするくらいうれしくて、おいしいとくべつなおべんとうでした。

もし、かみさまにおねがいができるなら、もういちどおとうさんと、おかあさんとぼくといもうととみんなでくらしたいです。でもおとうさんは、いつも空の上からぼくたちをみまもつてくれています。

おとうさんがいなくて、さみしいけれど、ぼくがかぞくの中で一人の男の子だから、おとうさんのかわりに、おかあさんといもうとをまもつていきます。おとうさんのおべんとうばこでしっかりごはんをたべて、もつともつとつよくて、やさしい男の子になります。

おとうさん、おべんとうばこをかしてくれて、ありがとうございます。

父のおみやげ

愛媛県伊予市立郡中小学校六年

藤井華純

「ただいま。」げんかんで声がすると、ドアのかぎを開けるのが私の役目。真つ黒な父の顔が少し笑顔になる。「はい、おみやげ。」夏になるといつもこのおみやげがある。スーパ－のふくろをボンツとわたされる。わかっではいるが、少し期待してのぞいてみる。「うえー。」鼻をつくような目にしみるにおい。そんな私の顔を見て、少しほこらしげな顔をする父。やつぱりかと思いがながら、そのおみやげを洗たく機の中に放りこむ。実は、そのおみやげというのは、汗かきな父が工作中、何度も着がえたシャツや汗をふいたタオルたちなのだ。父の仕事は建設業。真夏の炎天下では、体感温度は三十五度以上にもなるだろう。そんな中で一日働いたあかしのおみやげだ。しかし、私はそれをわたされるといつもふきげんになってしまう。おつかれ様つと言う前に鼻をつまんでしまう。それでも父はやつぱり笑顔のまま、暑い暑いと子供のようにせんぼう機を占領してしまふ。「かすみちゃん、ビール。」と、ふきげんな顔をしている私にニコニコ顔で注文してくる。その笑顔に負けて、ビールをとりに行くはめになる。父は一気に飲みほすと、大きな手で私の頭をなでしてくれる。とても大きな手。毛ガニみたいな手。ふと、父の手をみると、節が太くて、小さなきずがたくさんある。その中で私が一番おどろいたのは、つめが割れたり、そりくり返っていたことだ。きつと、この大きな手で重い物を持ったり、小さなきずを直したりして一日中働いているのだろう。「そのつめ、痛くない？」と、私が聞くと、「痛くはないけど、不格好だね」と、もう一本ビールを飲んでる。

私は本当は知っているんだ。つめだけではなく、腰も、うでも、ひざも、いろんな所が痛いとお母にしつぷをはってもらっている父の姿を。でも、私の前では弱音をはかない。「お前たちがお父さんの宝物だ」と言っつて、つかれていても笑顔でだきしめてくれる。父が暑い日も、寒い日もがんばつて仕事をしてくれるから、私たちは何不自由なく生活できているんだと思う。

ありがとうと面と向つて言うのは、なんとなく照れくさいから、五年後も、十年後も、洗たく機までおみやげをはこぶよ。感謝をこめて。

ぼくのお父さん

福岡県宗像市立日の里西小学校六年 藤近 宥祈

ぼくのお父さんは、まだ二十五歳です。なんでこんなに若いかというと、実はぼくとは血がつながっていません。今から五年前にぼくのお母さんと結こんして、二十歳の若さでぼく達兄弟三人のお父さんになってくれました。そして、二人の妹ができ、今では五人の子を持つお父さんです。

今の世の中、ぼく達家族のようなステップファミリーのぎゃくたいなどの事けんが多いことと、五人兄弟ということで好奇の目で見られがちですが、ぼくのお父さんは若いのに本当によくがんばってくれています。

お母さんが、五人目の妹を出産して入院している約一週間、仕事を休んでぼく達の面どうを見てくれました。お父さんの作ってくれた料理はともおいしかったです。お父さんが、がんばって家事やぼく達の面どうを見てくれたので、一週間何不自由なく過ごす事ができました。

お父さんが若いおかげで、ゲームなどの話が合います。まるでお兄ちゃんのように、一しょにいと楽しいです。

将来、ぼくが成人したら、一しょにお酒を飲みにいこうと約束しています。ぼくはその日が来るのが、とても楽しみです。

怒らせると、とてもこわいお父さんですが、ぼく達の事を本当の子供以上に色々考えてくれる、とても優しいお父さんです。お父さんとお母さんが結こんしてくれただおかげで、かわいい二人の妹もできました。ぼくにとってお父さんは、血はつながっていないけど、ぼくの大切な大好きなお父さんです。

お父さん、いつも朝早くから夜遅くまでお仕事がんばってくれてありがとう。若くてかっこいいお父さんはぼくの自まんのお父さんです。早く一しょにお酒を飲みに行こうね。

あともう一つ、いつもお母さんと仲の良いお父さん!! いつまでもお母さんと仲良くして、お母さんを幸せにしてあげてください。

優秀賞 低学年の部 ばあばとたからのしま

鹿児島県
鹿児島市立原良小学校一年

野口 真凜

きらきらとタイヤモンドみたいにひかるうみ。むしやとりのこえがする、みどりのやま。たからはこみたいなしまに、わたしのばあばはすんでいます。

こしきじまは、わたしのうちからとおくはなれていきます。ばあばにあいに行くには、ふねでかえります。ふねからみえるうみは、すきとおついで、すごくきれいです。ふねをおりると、ばあばが、きらきらしたえがおでまっついでくれます。

ばあばは、しまでひとりであらわしています。おしゃべりがだいすきで、おもしろいことをしゃべります。わたしがまねをしてはなすと

「あよあよ。」
と大きなこえでわらいます。わたしは、そのわらいこえがだいすきです。

ばあばは、うみでかいをとったり、はたけでやさいをつくった

りもします。ばあばのやさいは、さいこうで、とろけます。

「ばあばは、ひとりできみしくないの。」ときいたら、

「まりんちゃん、あそびにきてくれることが、ばあばのいきがいなんだよ。」といっていました。

ときどきしか、あえないけれど、ばあばにあえるときは、いっぱいいい、おはなしをしたいとおもいます。しまのことは、たくさん知りたいです。そして、ばあばにきかせてあげたいです。大わらいするばあばのかおをみるのがだいすきだからです。

あと十かいねたら、こしきじまにいきます。みなとできつとにこにこわらつて、ばあばがまっついでくれます。わたしのむねも、ときどき、わくわくふくらんでいます。

「だいすきなばあば、いつもありがとう。もうすぐいくから、まっついでね。」

とおくにも、いつもばあばのことわすれないよ。

優秀賞 低学年の部 お母さんありがとう

福島県
川俣町立山木屋小学校二年

星 悠大

ほくのお母さん、手がすごく大きいの。

この大きな手で何でもしちゃう。ほくがまだお母さんのおなかの中にいるときは、大きな手で毎日なでてくれたんだ。お母さんから聞いたんだけれどね、ほくはそのときのこととはわからないけれど、弟が生まれるときも、やつぱりそうしてたつて。

お母さんの手で作ると、何でも大きくなっちゃうよ。ハンバーグもちょうとく大。

「おみせやさんのより大きいね。」

と、ほくが言うと、お母さんはほくをちらつと見てにやにやする。

春にみんなでお花見に出かけたときも、おにぎりが大きくてびっくりした。

ほくは、そんなお母さんが作る、大きなものが大すきだつて、おいしさも、たのしさも、ほかのどれよりも大きいんだもん。

ほくのお母さんは強いよ。大きな手で、ほくたちをつか

まえるんだ。ほくたちが、どんなにたたくつても、大きな手にはかなわない。

この間、ごはんを食べているときに弟とふざけていたら、大きな手がとんできて、たちまち外にだされちゃった。

「大事なことをわすれた。」

「食べるものは、いのちなんだ。」

ほくたちはびっくりして、なきながらあやまったんだ。すると、大きな手かとびらを開けて、やさしくほくたちをつつんでくれた。

「ごめんさい。」

でも、やつぱり大きな手はいいな。

バレーボールをしているときの大きな手は、すごくかっこいいんだ。ほくのじまんだよ。ほくたちはときどき大ききくらべをするけれど、まだまだだせんせんおいつかない。いつか、この手をおいこしいな。

大すきな大きな手。

ありがとう、大すきな手。

優秀賞 低学年の部 だきしめたくなる

大阪府
堺市立錦西小学校 三年

大橋 詠一

「あーあ。またやつてる。」
いつもいつもぼくのつくえを開けて、えんびつやけしゴムをちらかしている。「またかあ…」ぼくはため息をつく。

さい近、頭がよくなったぼくの弟りゅうご。ぼくのつくえの中をあさってばかりだ。ちらかした後を直すのはぼく一人。ぼくは思わず、

「めつ。」とおこつてしまふ。ママにおこられても平気なくせに、ぼくが「めつ。」つて言うと、たちまちかなしい顔になつてなきます。それからママのところにかけよつて行く。

直しているとき、りゅうごがまた大急ぎでやつてきて「にやり」と笑いながら、えんびつをちらかす。

「もう。」と言つと、すなおにえんびつを返す。そんな時、ちよつとかわいと思う。

ぼくの友だちがあそびにきていたら、部屋にやつて来て、自分もあそんでいるつもりで、まだ言葉にならない言葉を一所けんめいしゃべっている。

ぼくのまねばかりして、出来なかつたら、「キー—。」つて言つて物を投げる。

ぼくがママにおこられて泣いていると、「がんばれ」と言つ

ているみたいに、頭をたたきにきて、はげましてくる。

「こちよこちよ」つてすると、「えへへ。」つて笑うから、ぼくも「んふふふ。」つて楽しくて、笑つてしまふ。

一年半前までは一人っ子だったぼく。

りゅうごが生まれて二人っ子。

おやつの際は半分こ。

おもちゃも半分こ。

ねる時もベッド半分こ。

お父さんや、ママにかまつてもらえるのも半分こ。

今まで全部ぼくだけのものだったのに、これからは、ずつとりゅうごも半分こ。だから、何だかそんな気分。

だけど、ふりかえるとりゅうごが笑つて立っている時、自分で色々考えて何かをしているのを見た時、

「いつてらつしやい。」とポンポン手を振つて学校に送つてくれる時、

ぼくはりゅうごを「ぎゅつ」とだきしめたくなる。弟がここにいるということがうれしいと思う。

ぼくの弟、りゅうご。この家に生まれてくれてありがとう。

お父さん、ママ、二人っ子にしてくれてありがとう。

優秀賞 高学年の部

おかえり

香川県

観音寺市立観音寺東小学校 四年

細川 夕佳里

「ただいまあ」と家に帰ると「おかえり」とおじいちゃんとおばあちゃんの声があります。私はその声を聞いてランドセルを下ろして手をあらいにいき、お茶飲んだり、おやつを食べたりします。おばあちゃんに学校であった事を話しをして自分の部屋へ行きます。

ある日、学校から帰るとげんかんのカギが閉まっていた。ました。

「あれ？ おかしいな」

私のむねがドキドキしてきました。私は、おじいちゃんの車を見に行きました。車はありませんでした。

「買い物へ行ったのかな」

とつばやきながら、ランドセルのおくに入れてある、あいカギを初めて出しました。あいカギでげんかんを開けて、

「ただいまあ」とリビングに入つて行きました。いつもの「おかえり」と言う声はありません。私は少しさみしくなってきました。

私は、次におじいちゃんの部屋へ行き、

「ただいま」

と言いました。やつぱり誰もいません。

私は、いるはずがないと思ひながらおふる場やトイレのドア

も開けてみました。

やつぱりおじいちゃんとおばあちゃんはいません。私は、なんとなくおちつかないまま、いつもおじいちゃんがすわっているソファにすわりました。

時計を見るとまだ5分しかたつていません。いつもこの時間は、おばあちゃんが学校の事をいろいろ聞いてきて、私は、おやつを食べながら、ちよつとめんどくさそうに返事をして、食べ終わると自分の部屋に入つていきます。今日は、誰もいないからすぐに自分の部屋に行けばいいのに、私はリビングでおじいちゃん達の帰りを待ちました。おばあちゃんの声がかきたいなあ。おじいちゃんまだかな…私は少しなみだが出そうになりました。

おじいちゃんとおばあちゃん私を待つてくれている事が本当はすぐうれしくて安心できてたんだなあって事がわかりました。

「ああ…いかん泣きそうや」テレビをつけようと立ち上がると、おじいちゃんの車の音がしました。私はあわててげんかんまで走つていき、今まで一番大きな声で言いました。

「おじいちゃん、おばあちゃんおかえり」

優秀賞 高学年の部 ありがとうの山

冷蔵庫の上に重なり合った、今にも崩れそうなラップの山。仏壇の前にそびえるのは、ろうそくや色々な香りのするお線香の山。テーブルの上には、写経用小筆の平たい山。

おじいちゃんの家には、とにかく同じ品物が大量にあるので驚かされる。もしもの時に備えて買い置きをしていたのだろう。(心配性のおじいちゃんらしいな)と、ついつい微笑んでしまうが、もうその山がそれ以上高くなることがないと思うと、もうその品物が使われないかと思うと、立派な山が頼りなく寂しそうに見えた。

最高峰の高さを誇っていたおじいちゃん作の山は、その小筆で書きためた般若心経のエレレストだった。何年か前に質問した時、「今日で、三万五千枚目を書いたよ!」と、言っていたから、優に四万枚は越えていたと思う。あの時、「毎日、亡くなつたおばあちゃんやご先祖様の供養の為に書いているんだよ」と、いつもの笑顔より更に丸い笑顔で教えてくれた。おじいちゃんは、亡くなった大切な家族への思いも山盛りだったのだ。

そんなおじいちゃんの丸い笑顔が、いつの間にか半分くらいになり、いつの間にかもつと小さくなり、信じられないくらい小さくなった四月の僕の誕生日の前日、おじいちゃんはおばあちゃんの元へ行ってしまった。

おじいちゃんは、唯の男孫である僕を本当に可愛がつて

優秀賞 高学年の部 小さなお母さん

「もーみーちゃん何やつてるよ!」

ああ、また侑ちゃんを怒らせてしまった。怒らせたくて、怒らせている訳じゃないのに、いつもこうなってしまう。私には、中学三年生の姉がいる。私は、姉である侑ちゃんが好き。でも、いつも失敗ばかり。「みーちゃん、電気つけばなしだよ!」「もーなんで、一人で留守番嫌なの?」「またごはんこぼしてる」。毎日、毎日、侑ちゃんは私にプツプツ。でも、言いながらも、私を助けてくれるやさしい侑ちゃん。それなのに、今月も怒らせてしまった。

侑ちゃんは、私の小さなお母さんだ。うちには、父がない。父は、私が4歳の時事故にあい、亡くなってしまった。あの日から、母が父のかわりに働きました。まだ小学2年生だった侑ちゃんは、あの日から私の世話をしてくれるようになった。仕事で帰りの遅い母にかわって、夕飯をお皿にいれたり、片付けたり。お風呂に入れてくれたり、宿題もみてくれた。私が一人ぼっちにならないように、お友達と侑ちゃんが遊ぶ時は、いつもうちで遊んでくれた。小さかった私には、侑ちゃんがしてくれる事が、どんなに大変な事か、わからなかった。それどころか、私は何も考えず、年を重ねても自由気ままにしていた。友達の家遊びに行ったり、家の事は相変わらず、侑ちゃんに任せ、お手伝いもしないで、ごろごろしていた。ある時、「いい

群馬県 群馬大学教育学部附属小学校 六年 伊佐 碩恭

くれた。夢を持って頑張っている僕を、いつも優しく強く応援してくれた。おじいちゃん流の応援もこれまた桁外れの特盛りだった。おじいちゃんからももらった品物で一番多いのは「お守り」。どこへ行っても、神社仏閣で僕の健康や夢の実現をお祈りしてくれていたから、その数は驚くほどだ。低学年の頃、習い事用の大きなバッグがお守りでいっぱいになり、肝心の教材が入らない「お守り専用バッグ」と化した時は、家族みんなで大笑いした。

般若心経の山を崩しておじいちゃんのお布団にしたあの日からもう五ヶ月が経つ。しばらくの間、笑顔のおじいちゃんがああ家に居ないことがどうしても信じられなかった。僕はなかなか奉納できないお守りの山を眺めながら、おじいちゃんに(あーしてあげれば良かった、こーしてあげれば良かった)と、情けない後悔の山ばかり作っていた。

でも、この夏、僕の大きな夢だった大会を前に、このまま自分で駄目だと気が付き、毎日おじいちゃんの写真に手を合わせて、「おじいちゃんありがとう」と祈ることにした。おじいちゃんが「もういいから」と、まん丸笑顔で遠慮しても、感謝の気持ちを永遠に伝えるつもりだ。僕は孫の中で番おじいちゃんに似ているのだから、後悔の山なんて格好悪いのはやめて、僕作の「ありがとうの山」を天国のおじいちゃんに届けたい!

静岡県 浜松市立曳馬小学校 六年

北 実怜

よね、みーちゃんは。好きな事出来て。私なんて……」と言うと、侑ちゃんは声を詰まらせ部屋に閉じこもってしまった。私は、何を言われたのかわからなかった。そして、今までの生活を考えて、やつと気が付いた。そうだ。今までの侑ちゃんは、自分の時間を私の為にたくさん使ってくれてたんだ。それなのに私は、大きくなっても、それが当たり前と侑ちゃんに甘えていたのだ。そう思うと、自分が嫌になった。恥ずかしくなった。涙が、いっぱいあふれてきた。大泣きをしている私に母が、「侑ちゃんね、パパが死んじゃった時にね、泣きながら、「みーちゃんが、かわいそうだ。侑歩は、八歳までパパといれたし、遊べたけど、みーちゃんは、まだ四歳だよ。まだ赤ちゃんだし、パパの事も忘れちゃうよ。かわいそうだよ。侑歩、みーちゃんにいっぱい甘えさせてあげる」って言ってたんだよ。お姉ちゃんは、実怜の事が大好きなんだよ」と、そとと教えてくれた。私は、胸が熱くなった。本当に素敵な姉をもっているんだと思った。ますます、侑ちゃんに感謝の気もちでいっぱいになった。ありがとうが、あふれた。

「みーちゃん!」
侑ちゃんが、大きな声で私を呼んでいる。私は、侑ちゃんの良い笑顔が好き。侑ちゃんの妹に生まれてこれて、本当によかった。

てんごくのおとうさんへ

群馬県
高崎市立六郷小学校一年

坂本 岳央

おとうさん、てんごくも、まいにち、あついですか。ほくは、あつさにまけず、あきはやくおきて、ラジオたいそうにいったり、がっこうのプールへいって、おもいつきりおよいだりして、げんきにすごしています。

おとうさんは、ほくが、がっこうを、いやがらずに、ちゃんといけるかどうか、しんばいしていたけど、がっこうは、すごく、たのしいです。たんにんのゆうみせんせいは、やさしいし、なかのいい、おともだちも、たくさんできました。

さいしょ、ほくは、きのうまで、あんなにげんきだった、おとうさんが、とつぜんしんでしまった、ということが、よくわかりませんでした。いつか、きつと、ほくたちのところへ、かえってきてくれると、おもっていました。

ところが、なんにち、まつても、おとうさんが、かえつてきてくれないので、ほくは、おかあさんに「おとうさん、ほんとうにしんじやったの。」と、きいてみました。

「おとうさんは、しんだんじゃなくて、うちゆうへいって、ちきゆうのみんなをまいにち、それからうままもつてくれているんだよ。」と、おかあさんは、こたえました。

それから、ほくは、いちにちに、なんかいも、そらを見るようになりまし。がっこうで、おともだちとけんかしてこまったとき、じょうずに、えがかけなくて、なきそうになったとき、おとうさんのことをかんがえているうちに、し

ぜんとゆうきがわいてきました。
（おとうさんは、なんて、すごいだろう。きつと、ほくたちのかみさまになったんだ。）と、そのときほくは、おもいました。

おとうさんは、ほくがわからないことがあると、ほくがほんとうに、わかるまで、とことんおしえてくれました。げすいどうのしくみや、ちずのみかたなど、パソコンでくわしくしらべ、ずにかいたりして、ていねいにおしえてくれましたね。おかげで、いつのまにか、ほくも、パソコンをそうさ

できるようになりました。しょうぎやオセロ、でんしゃのしゆるいやしくみなど、おとうさんにおしえてもらったことは、かぞえきれません。とくに、ペットボトルで、ロケットをつくりにかんのんやまつれていくれたときのことは、いまでもよくおぼえています。そこでおしえてもらった、ぎゆうにゆうパックのプーマンは、ほくとおとうさんのおもいでがまつった、だいじなたからものになりました。

このあいだ、じょうききかんしゃのきてききこえてきたとき、ほくはおとうさんとデゴイチにのつて、みなかみへいったときのことをおもいだしました。ロープウェイとゴンドラにのり、てっぺんまでいきましたね。

ほくは、おとうさんとおもいでをこれからもずっとたいせつにしていきたいです。

入選 低学年の部

ありがとうのしろいはな

福島県
会津若松市立謹教小学校一年

鈴木 愛渚

おじいちゃんのおうちにくとちゆう、山と山のあいだのせまいぐにやぐにやみちをとるので、きもちわるくなってしまうことがなんともありました。

いぬわしがすむ、はかせ山とみようじんがたけの山のみどりいろの中に、まつしろなおはなのじゆうたんがひろがるころ、やっとおじいちゃんとおばあちゃんのうちがみえてきます。まだつかないうちから、おじいちゃんとおばあちゃんのニコリえがおと、やさしいこえが、あたまのなかにうかんできて、くるまによつて、きもちわるかったことなんか、わすれてしまいます。

「よくきたなあ。あがれ、あがれ。」と、だつこしてもらうと、ころのながが、ポツとあたたかくなった気がします。

山のはたけで、たくさんのかすみそうをつくっているの、まいあさ、よじはんにおきて、あさしごといでかけるのは、とてもたいへんだとおもいます。

わたしのせよりも大きくそだつた、かすみそうを、だいたい「メートルくらいのながさになって、シートでたばねて、トラックにつんでさきようこやまでもつてきます。それから、ながさをそろえて、はっぱをとり、大きなことに十本ずつたばねて、わごむでくるくるつたばねます。たばねたはなは、はなをながもちさせる水につけておきます。たばねたさいごに、はこにいられてしゅつかします。ふたりでいっしょう

けんめいにはたらいで、三十ケースぐらいたします。

「きょうは、大きくて、きれいなながさいなあ。よろこんでもらえつべ。」と、おじいちゃんもおばあちゃんもニコニコえがおになります。

わたしも、はっぱとりのおてつだいをしながら、どんな人がかつてくれるのかなとそうぞうすると、なんだか、ドキドキしてふしぎなきもちになります。おてつだいながら、このおはなをかつてくれた人が、きれいなはなをみて、よろこんでくれたら、うれいなあとおもいました。

おはなは、なにもしゃべらないけれど、きつとつくっている人のきもちや、プレゼントする人のきもちがつたわるような気がします。

山おくのきれいなせらと、水のあるところだから、きれいなゆきのようなかすみそうがさくんだよと、おじいちゃんがおしえてくれました。はなだつて、人のきもちがわかるんだよと、おばあちゃんはいながら、こやしをあげて、せわをしていました。わたしは、だいに、かわいがつて、おじいちゃんとおばあちゃんがそだてているから、やさしいかすみそうがさくのだとおもいます。

いつもやさしくて、たいせつなことをおしえてくれる、おじいちゃんとおばあちゃんが大すきです。ありがとう。おてつだいながね。

「もつちゃん。」

これは、ぼくが弟のときにつけたよびかたです。それから、みんなもつちゃんとよぶようになりました。

ぼくは、前から兄弟がほしかったので、もつちゃんが生まれた時は、すぐうれしかったです。だから、赤ちゃんの時には、だっこをしたり、ミルクをあげたりしました。絵本もいっぱい読んであげました。

そんなもつちゃんも、今は三才です。ぼくは、ひらがなを教えてやったり、牛にゆうをあげたりします。いつしよにお風呂に入って体や頭をあらってあげます。

もつちゃんは、かいじゅうごっこが大好きです。本とうにつよいです。手かげんなしでかかってくるので、ぼくはいつもまけます。サツカーもつよいです。パスするとうまくとつて、つよくキックします。ぼくは、もつちゃんとよくクツキーをつくります。いつも、まだできていないのに食べようとします。もつちゃんは、気もちのわるい虫をつかんできて、みんなをびつくりさせます。

そんなもつちゃんを、こちよこちよするとかわいくわらうので、もつこちよこちよしたくなります。それに、もつちゃんは、お母さんにおられると、泣きながら、ぼくにくっついてきます。それがうれしくて、たまらず

ぎゅつとしてしまいます。

でも、さい近、もつちゃんは、すぐく生いきです。まるで、お母さんのように、「早く食べなさい」とぼくに、えらそうに言います。自分もまだ食べおわっていないのに。もつちゃんは、ぼくのおやつも食べてしまいます。ぼくは、いつものこしてあげているのに。

もつちゃんがいると、できないこともあります。お父さんとしようぎや、すごろくをしていると、たいいもつちゃんにぐちゃぐちゃにされます。ピアノのれんしゅうも、べんきょうも、じゃまされます。大じな図かんも、やぶられました。それに、お母さんにおられることも、ふえました。大体はもつちゃんがるいのに。

でも、ぼくは、もつちゃんがいまいちがいたいと思ったことは、一度もありません。それほどもつちゃんは、かわいいのです。一週間前から、子ねをかっています。もつちゃんは、本とうのお兄ちゃんのように子ねをしつけています。それを見ていると、ちよつとわらつちやいます。

ぼくにとつて、もつちゃんはさいこうのあそびあい手です。「もつちゃん、いつもあそんでくれてありがとう。」これは、お兄ちゃんが弟に言うことじゃないのかな。これからもいつしよにあそぼうね。

入選 低学年の部 ありがとう

お兄ちゃん

お兄ちゃんがわらうとぼくもわらう。お兄ちゃんが歌うとぼくが歌う。お兄ちゃんがしゆくだいを始めたらぼくも始める。ぼくはお兄ちゃんが大好きだから、同じことをやります。

お兄ちゃんは、ぼくがお母さんにしかられているといつもなぐさめてくれます。そして、お母さんよりずっとやさしく、

「けいたは、いけないことをしたけど、ちゃんとできるはずやで。」

と言ってくれます。

今年の夏、二人で電車で中百舌鳥のおばあちゃんちに行つた時、ぼくはお兄ちゃんをこまらせてしまいました。地下鉄の出口がたたくさんあった時、ぼくはすぐいつもの出口を思いだして左の方へ走っていきましました。

お兄ちゃん

「反対やで、もどつて来いや」と何回も言いました。だけどぼくは、お兄ちゃんの言うことも聞かず、地下鉄の出口を出てしまいました。お兄ちゃんはハアハア言いながらおいかけってきます。ぼくはうれしくてどんどん

大阪府

四天王寺学園小学校 二年

谷口 佳郁太

走つて行きました。気が付くと今までに来たこともない場所まで来ていました。ぼくは、少しなきたい気持ちになりました。やっぱりお兄ちゃんの言うことを聞けばよかつた……。ぼくは、そう思いました。

お兄ちゃんはすこしこまった顔をしていましたが、ぼくの手をつないで元の所へ連れて行つてくれました。そして①と書いてある出口に行きました。そしたら、おばあちゃんの顔が見えました。ぼくもお兄ちゃんもうれしくて、おばあちゃんの所へ走っていつて、ぎゅつとだきつきました。ぼくは、その時、お兄ちゃんの目に少しなみだが出ていたような気がしました。お兄ちゃんこまらせてごめんね。そして、ありがとうと思いました。

今どからお兄ちゃんの言うこと、しつかり聞くね。

ぼくのお兄ちゃんは、たよりになるお兄ちゃんです。たまにけんかするけど、ぼくはお兄ちゃんの弟でよかつたです。

何でも知っているお兄ちゃん。また勉強も教えてね。いつもありがとう。

お兄ちゃん。

入選 低学年の部 お母さんいつもありがとう

千葉県
富津市立湊小学校 三年

佐藤 宜之

三年生になった四月のはじめ、お母さんが「おぶ君、よく食べるようになってきたので、このころ体重がふえてきて太り気みだね。それに運動もにが手のようだし、運動不足にならないように、夕方、お母さんと歩こうか。お母さんもやせたいし、けんこうにいいっていわれるから歩こうと思うの。」と、言いました。

ぼくは、サッカーもドッジボールも大好きです。ほんとうは友だちのようにサッカーやドッジボールが強くなりたいたいと思っています。

でも、マラソンの時なんかは、すぐに「ゼーゼー」してしまうし、太っているのとび箱やてつぼうはにが手です。

お母さんの話を聞いて、がんばって歩いてみようと思ったので、「やる」と約束してしまいました。

でも、実さいに毎日歩いてみるとつかれて大へんでやめたくありません。お母さんは、まわりを見わたしたり、はな歌を歌ったりしながら楽しんで歩いています。「田植えがもう終わったわ。早いね。」とか、「つばめがとんでる。どこの家にするを作ったのかしら。」とか、「梅の実がたくさんなっているわ。家でも梅干作ろうね。」などと、いろいろなことに気付いて、教えてくれます。理科の時間に、お母さんと歩いてみつけたお天気のこと、虫や鳥、田んぼの様子や草花などがとても役に立ちました。とくに知らなかった道ばたの草花の名前がおぼ

えられてよかったです。一時間ぐらい歩くので足が痛くなってきた、やめたいと思つて、お母さんを見ると、首にまいたタオルで顔をふきながら「おぶ君、今年の夏休みはジャンポールで行こうね。泳げるようになるといいね。」と、すまして歩いているので、やめるといいたせません。と、いね。

七月に入つて、じつといても汗が出るようになってきたので歩くのがめんどくさく、つらくなってきました。

「明日から、夏の間は歩くの中止しようよ。」と言つたら、お母さんは、

「やめるのはかんたんよ。でも苦しいからつてやめてどうするの。この間のオリンピックで金メダルをとった人たちは、みんな苦しいのをがまんして練習してかちとつたのよ。おぶ君、がんばろうよ。続けようよ。」と、話してがんばることを教えてくれました。

このごろなれてきたので、ぼくの方から、「お母さん、早く出かけようよ、何ぐずぐずしているの。外で待っているよ。」と、言えるようになりました。これからは、お母さんが「やめようよ。」と、言つてもぼくはせつ対にやめないで続けるつもりです。

お母さんは歩くだけではなく、パソコン、PTAの役員などいろいろなことにチャレンジしてすごいです。世界でただ一人のぼくのお母さん、大・大・大好きです。ありがとう。

入選 低学年の部 お母さんとぼくのせつめい書

三重県
桑名市立久米小学校 三年

谷口 拓海

「いつてきます。」
ぼくは、大きな声で言った。そして、ランドセルをしょつて、げんかんをとり出した。家がみえなくなる前にふりかえる。

(いた、いた。)
げんかんで、まだ大きく手をふっている人がいる。そう、あれがぼくのお母さんだ。

そして、ぼくはしゅうこう場所に向かった。お母さんは、いつも、ぼくが見えなくなるまで、手をふつてくれる。それも、時どきバジヤマのままで!!

「行ってらっしゃい。」
ぼくは、その言葉を聞きながら、毎日学校へむかっているのだ。(そうだ!!今日の夕ごはんに、カレーを作つてあげよう。)

ぼくのカレーは、天下一品だと、ほめてくれる。さいきんでは、肉、玉ねぎ、にんじん、じゃがいもなど、ぜんぶ一人で切つてカレーが作れるようになったのだ。

ぼくは小さいころ、お茶わんあらいをうれしそうにやつていたんだよ、と聞いたことがある。子ども用のほうちょうを、はじめてプレゼントしてもらった時も、ニコニコきのこを切つてみたんだ。さんねんだけど、ぼくはそういうことをせんせんおぼえていないのだけだ。

でもね、今、料理をするのがとても楽しいんだ。いろいろな切り方を教えてもらつたり、いろんな料理を手つたうことができるから。

「いつもおてつだいありがとうね。」
お母さんが言う。ぼくは、(もつと)いっばいできるようになるから、まつてね。)

ほんとうは、そう思っているんだ。
学校に着いた。氷がいつぱい入つたお茶をゴクゴクのみんだ。(あー、つめたくておいしいなあ。)

キーンコーンカーンコーン!
もうすぐ、じゅぎょうがはじまる時間だ。お母さんは、そうじきをかけている時間かな。それとも、せんたくきをまわしている時間かな。

そして、がんばつてぼくはべん強中。お母さんはなにをしているのかな。
そうだ、今日は大きな声で言う。
「ただいまあ。」

げんかんの前で言うかな。2かいのまだから手をふつてくれるかな。
いつも、ぼくが帰るのをまつていてくれるんだ。
お母さん、いつもいつもありがとう。

入選 低学年の部 おじいちゃんありがとう

千葉県
千葉市立星久喜小学校三年

加藤 愛理

「もーおーおじいちゃんの顔をわすれちゃうよ、ずっとあってないよ何であい理だけお見まいには行けないの」「かんせんしようがこわいのであるべく子どもは近づけないでとかんごしさんに言われたの」「何だかお母さんの顔がこわい。まるでおこられたみたいだ。」

「ふーんじゃあけたい電話にかけていい、声を聞いてみるよ」「それだめゆつくりねかせてあげようね」「かんせんしようって何」「ばいきんさんの事がな」「あまりせつ明してくれなかつた。またおこられた気がした。」

「わかつたきれいに手をあらうから手紙をとどけてくれる」「わたしは十回手をあらった。わたしとおじいちゃんはなかなかよい。自分で考えた手紙なをひろうしあつたり絵を書くのがすきで二人でスケッチブックいっぱい書いてたりした。それなのに、「にわの花の水まきをたのむよ」とれいぞうこのでん言ボードに書いてあつただけで入院してしまつた。おじいちゃんが今どうしているのか知りたかつた。手紙をとどけてほしいと思つた。病室に入れないのでおじいちゃんが五かいのまどから、ちゅう車場にいるわたしに手をふつてくれた事があつた。わたしは、はずかしかつたけどお父さんにだつこしてもらつて大きく手をふつた。それからどれくらいたつたのかな手紙のへん事がこなくなつてしまつた。」

入選 高学年の部 いつもありがとう、おとうさん

石川県
羽咋市立邑知小学校四年

岡田 涼子

「おーい、涼子。田植えきに乗るか。」
と、おとうさんが、わたしの手をとつて乗せてくれました。大きな田植えの上は、涼しくてながめもよく、とてもいい気分でした。きかいが動いて、一本ずつ苗が植えられていくのを見つめていると、「とうや、じょうずに植えるやろ。いい気分やなあ。」と、お父さんが言いました。
「うん、いい気分や。最高やよ。」とわたしが返すと、お父さんはとびきりの笑顔で、わたしの頭をなでてくれました。

田んぼ仕事をしている時のお父さんはとてもかっこいいです。お父さんは、じいちゃんがなくなつてから一人田んぼの仕事をしています。ペアリングの会社にも行つているので、田んぼの仕事は、休日や仕事の前か帰宅後の夕方に行つています。たくさん働いてきて、つかれているはずなのに、弱音をはかずに、いつも元気に田んぼの仕事をしています。とてもがんばり屋で努力をしているお父さんは、じまんのお父さんです。

ペアリングの仕事は、鉄をけずるので危ないことがあると、お母さんから聞いたことがあります。

この前、お父さんは、指に包たいをまいて帰つてきました。金ぞくのはへんがとんできて、きず口から血がとまらなかつたので、お医者さんでぬつてきたとお母さんに話して見ました。その後、夕ごはんを食べている時、

「今日はいそがしいよお赤はんをたいてたくさんりよう理も作つてビールもひやさなくちゃね」とおじいちゃんの事を聞くときげんになったお母さんがうれしそうにわらつている。そしてわたしに「おじいちゃんかえつてくるよ」とVサインをくれた。わたしはむねが「ドキン、ドキン」とした。何回もにわに出てみどりようち園の角までむかえに行つた。しずかに車の止まる音がした。かみの毛がひな鳥のように少しだけしかなくて風がふいたらとんじやいそうなくらい細くなつていた。見なれないつえを、ついて「ふわーふわー」とゆつくりゆつくり歩いてきた。わたしはびつくりしてその場から動けなかつた。「あい理たたいま」体中の力をふりしぼつたような声だつた。「あつおじいちゃんの声だ。元気はないけどいつものやさしい声だ」とびついたらたおれちゃうのでそつとつえをもつ手をにぎつた。手紙でやくそしたとおり病氣とたたかつてがんばつて、つらいちりょうにたえたんだ。「たぐさんのけましの言葉がつまつたお手紙を書いてくれてありがとう」とおじいちゃんがわたしに言つた。ほつべが「じゅわー」といたくなきてきたけどぐつとがまんした。「もう三歩でお家の中だよだいじょうぶおじいちゃん帰つてきてくれてありがとう」とわたしは答えた。」

「お父さん、だいじょうぶなん。」と、小さな声でお母さんに聞くと、

「うん。だいじょうぶやよ。涼子心配してくれてありがとう。」と言いました。続けてお母さんは、「お父さん、まつたく、あれだけ気をつけてつて毎朝言つてるのに、もつとよく見て働いてくださいよ。たのみますよ。」と、半分おこつたように、お父さんに言いました。お母さんの心配な気持ちがあつたのか、お父さんは、「わかつてる、わかつてる。」と、大きくうなずいてばかりいました。

きずは少しづつよくなつていきました。でもその間も、お父さんは、早起きして田んぼの水回りや草取りをしていました。苗は、ぐんぐん成長していくので、毎朝每ばん気にかけていました。

お父さんに、どうしてそんなに働けるのか聞いてみると、「そうやなあ、むずかしいこと聞くなあ。どうしてつて言われてもなあ。人間は、生きていくために働かんとだめなんや。涼子は今はちゃんと勉強することが大切なんや。」と、言いながらおでこをくつつけてきました。「そうそう、お父さんのこういうところが、わたしは大すきなんだ」と思いました。

お父さん、これからも元気に働いてくださいね。いつも本当に、ありがとう。

入選 高学年の部 お父さんとアイコンタクト

徳島県
徳島文理小学校 四年

小川 康伸

たんしんふにんをきつかけに、お父さんとくらすきよりはぐーんと遠くなったけれど、お父さんを思う気持ちもぐっと近くなりました。いっしょにくらしている時は、何もかもがふつうで、話しても食事でも毎日の生活もあたり前のようすぎっていました。

お父さんが高速バスで帰るのを見おくる時、バス二枚のとびらの向こうがずいぶん遠く見えます。

ひさしぶりに会う時は、話してもたくさんするけれど、キヤッチボールなどをする時には、ぼくの「あのね！」も目でパチパチ。

お父さんの「そうか！」も目でパチパチ。ボールをなげ合いながら交しんできました。

お母さんには「ありがとう」と言う時があるけれど、お父さんに「ありがとう」はあまり言った事がなかったと思います。

毎日朝早く仕事に行つて、ぼくがねたころ帰つてきます。今でもそれは変わらないと思うけれど、たまに会うようになったらお父さんはできるだけぼくと遊んでくれる時間をとつてくれるようになったと思います。きつといつも一人で生活しているの、さみしいだろうと思います。

ぼくとお父さんが、キヤッチボールやサッカーをしている時、お母さんは食事を作つてくれています。家に帰ると、

入選 高学年の部 ありがとうおじいちゃん

東京都
豊島区高松小学校 四年

菊池 純

「じゅんちゃん、ちがう色がさいているよ。」おじいちゃんの大きな声が聞こえます。ぼくは、おじいちゃんが毎年少育している朝顔を見に、急いで下に行きます。いつもピンク色の花だけだったのに、今年は同じ種から、むらさき色と青色の花がさきました。

「不思議だね。どうしてだろうね。」と、ぼくは聞きます。「きれいだなあ。すごいだろ。」と、おじいちゃんは自まん気です。ぼくの質問の答えにはなつていませんが、とてもうれしそうです。朝顔が大好きなんです。おじいちゃんは、なぜ朝顔が大好きなのでしょう。いつから育てているのでしょうか。

ぼくはおじいちゃんといっしょに住んでいます。ぼくがピアノの練習をしていると、どこからかはく手が聞こえます。おじいちゃんです。まちがえてもはく手をしてくれます。上手にひけると大きいはく手をしてくれます。近所に聞こえていそうではずかしいです。

おじいちゃんは、よくぼくを探しに二階に上がってきます。

おじいちゃんの足音はすぐにわかるので、ぼくは急いでかくれます。ぼくは小さい時、いつも丸いふわふわのクッションの下にかくれました。おじいちゃんはそのクッション

ブーンといいにおいでぼくたちを待つてくれています。ぼくはこんなあたたかい家族といっしょにいるんだなあと、ごほんからたちこめるけむりを見ながら思いました。言葉ならわかること、伝わることはもちろんある。

言葉だけでは、わからないこと伝わらないこともある。でも言葉でなく目だけでも気持ちが伝わることもできるんだと思いました。

これは、ぼくがお父さんを思う気持ち、お父さんがぼくを思つてくれている気持ちが、重なっているからわかるのだろうな。ぼくは「ありがとう」をお父さんにアイコンタクトにのせて送りました。お父さんも「わかつているよ。今ははなれているけれどおたがいがんばろう」ということをアイコンタクトで送つてくれました。

お母さんに言つたらそれは、「きずながあるからだよ。」と教えてくれました。

「きずな」それは、「たちきることのできない人と人のむすびつき」

お父さんはきつと、いつも遠くからいつもぼくの事を思つてくれているんだろうな。

この作文を書いた後に、お父さんに、「お父さんありがとう。」と大きな声で言つてみようと思います。きつとやさしくアイコンタクトで返事をしてくれると思います。

を必ず、持ち上げてみます。ぼくは、もうそんなに小さい場所にかくれることはできないのに、一度は持ち上げます。ぼくはおかしくてふき出してしまいます。そして見つかつてしまいます。

最初のほうにさいたアサガオの種をとりながら母に聞きました。

「おじいちゃんはどうして朝顔が好きなのかな。いつから育てているのかな。」

母の返事にびっくりしました。おじいちゃんが最初に育てた朝顔は、ぼくが一年生の時に育てた朝顔の種からだったのです。ぼくは、すっかりわすれていました。

「ぼくが育てた朝顔の種です。来年までください。」という手紙といっしょにわたしたそうです。ぼくは四年生になったので、今年の朝顔は四代目だったのです。来年は植木ばちがきつと六つになるので、いっしょに手伝うつもりです。どんな色がさくか楽しみです。なぜ、ちがう色の花がさくのか調べて、教えてあげようと思つていきます。

おじいちゃん、ぼくの朝顔を大切に育ててくれてありがとう。ぼくのこと大切にしてくれてありがとう。これからもずつとぼくのことを見守つてください。

入選 高学年の部 おばあちゃんとの十二年

東京都
墨田区立東吾嬬小学校五年

麻野 花紗

「はるちゃん、帰るよ。」

おばあちゃんがむかえに来た。保育園からの帰り道、いつもいつもおんぶをしてもらっていた。今思えば、あんなに小さくて丸く曲がったおばあちゃんの背中に私は重かっただろうな。でも、おんぶしてもらう帰り道はとても楽しかった。

会うたびに大きくなっていく私におばあちゃんは、しわしわの温かい手で、ぼうしを作ってくれた。ぼうしの他にも、ズボンやワンピースをいっぱい作ってくれた。

三年生になったころ私は、時間の計算がまったく分からなくて困っていた。そんな時おばあちゃんが教えてくれた。そして、私は少しずつ分かるようになっていった。

おばあちゃんの教え方はとてもおもしろかったから。

四年生になって、新しい学校へ転校した。慣れない学校からの帰り道、ふと気づくと通りに置かれたイスにどこかで見たような人がすわっていた。それはおばあちゃんだった。おばあちゃんは、私を見るとニコニコ笑ってくれた。私が一人で帰るのが心配だったから、学校か

ら帰るのをずうっと待っていたというのだ。私の心配な気もちをわかってくれたのかなって、うれしかった。

私はだんだん大きくなっていく。おばあちゃんはだんだんと年をとっていく。それでも、おばあちゃんは痛い足をがまんして私に会いに来てくれる、電車を30分、さらにバスを30分乗って。遠い遠い道のりをただ私のためだけに来てくれる。

おばあちゃんとの思い出は、どんどん増えていく。ここからも、もっともっと増えていくだろう。

私は大きくなるとともに、願いができた。それはおばあちゃんがずうっと元気でいてほしいということ。私はいつもそう願っている。

もしも、おばあちゃんがつえをつく日が来たら、私となりでずうっと手をつないであげるからね。私はそう決めている。

おばあちゃんとの十二年は、私の宝物だ。これからは、私がおばあちゃんのお世話をするね。ずつといっしょにいるから、おばあちゃん、安心していいからね。

入選 高学年の部 お母さんがお父さん

奈良県
山添村立やまぞえ小学校五年

南 俊 太郎

ぼくのお父さんは2年前にとつぜん亡くなりました。お父さんは、仕事が休みの日曜日には、キャッチボールをしたり、よくぼくをどこかにつれていったりしてくれました。お父さんが亡くなってから、お母さんは、お父さんのあとをついで仕事をしています。

お母さんが仕事が休みの日曜日

「キャッチボールをしようか。」とお母さんは言いました。そしてキャッチボールをしていると、へたくそだったけど、お母さんがお父さんのように思えて、過去にもどれたような気持ちになりました。

お父さんが亡くなる少し前、

「秋になったら釣りに行こう。」とお父さんは言いました。だけど、お父さんはとつぜん亡くなってしまいました。ぼくは、ずつとその約束のことを考えていました。

1年たったある日、お母さんが、

「海に釣りに行こうか」とぼくをさそいました。ぼくとお父さんの約束をお母さんは知っていたのかなあと思いました。行って見たのはいいけれど、お母さんは釣りが生まれではじめてで、ぼくに

「えさのゴカイをつりばりにつけて、こんなもんきもちわるくてさわれへん。」

と言いました。まったくしかなかったがないな。ぼくは、ぬるぬるするゴカイをつりばりにつけました。つり糸を海に入れると、すぐつれました。いつの間にかお母さんもゴカイをさわれるようになりました。これが海釣りなんだなあとぼくは思いました。

前、ダム湖でお父さんとつりをした時は、1びきもつれませんでした。海では、きすやめごちが20びき以上もつれました。

釣った魚は、お母さんとお姉ちゃんとぼくで、天ぷらやおさしみに料理してあつという間に全部食べました。

お母さんはときどきお父さんになって、はじめてのことに挑戦しておもしろい体験をぼくにさせてくれます。お母さんになってもくれます。ぼくにしたらお母さんには、お母さんでもあり、お父さんでもあります。

お母さん、ぼくのためにいろいろなことに挑戦してくれてありがとう。ぼくは、挑戦しないと何も起こらないんだなと分かりました。失敗してもいいからとにかくやってみるのが大事だね。ぼくも、お母さんのようにいろいろなことに挑戦していきたいなと思っています。できていなかったら、お父さんになって「コラー」

とおこつてね。これからもよろしく。

入選 高学年の部 やさしい私のお姉ちゃんへ

千葉県
松戸市立松飛台第二小学校 五年

柴田 津菜

お姉ちゃん。いつもありがとう。

お姉ちゃんは、もう24歳だね。8月の終わりに、結婚式を挙げて家を出てしまふからあまり会えなくなるね。でも、私はお姉ちゃんの住む家に会いに行くからね。

お姉ちゃんとは、13歳年がちがうからいつも私が小さかったころ、ミルクを飲ませてくれたり、お母さんがいない時はめんどうをみてくれたり、いろいろ手伝ってくれたとお母さんが言っていたよ。私は小さかったから、あんまり覚えていないけれどめんどうをみてくれてありがとう。お姉ちゃんがめんどうをみてくれたと知った時すごくびっくりしたよ。

私がようち園くらいだった時、お姉ちゃんは、よくオセロをして遊んでくれたね。私は、オセロのやり方を知らなかったから、やり方を教えてくれたね。そのおかげでオセロがすこくうまくなって今もオセロが大好きだよ。また一緒にやりたいなあ。

勉強も、たくさん教えてくれるよね。お姉ちゃんは私よりいろいろな事を知っているからたくさん教えてくれるんだよね。もしも、お姉ちゃんがいなくなったら、勉強がわからなくなつて大変になつちゃうよ。でも、もうあまり教えてもらえなくなつちゃうからこれからは、一人でもがんばるよ。でも、たまにケンカもしたよね。何かを取り合つたりし

てすこくケンカしたよね。それもあつてとても仲よくなつたね。今は全然ケンカしなくなったけれど、あの時のケンカは今ですごく思い出になったよ。
特に、お姉ちゃんと会えなくなつてしまふのがいやだよ。ずっと一緒にいたのに、家を出ちゃうからとても悲しいよ。だけど、お姉ちゃんの結婚式はすこく楽しみだよ。だつていつもいるお姉ちゃんがどんな花嫁姿をみせてくれるのかなと思つているからだ。お姉ちゃんは、きつとすこくきれいな花嫁さんになっているだろうなと思つているよ。結婚式では、私はお姉ちゃんに花束を渡す係なんだよね。私、うまくだできるかわからないけれどがんばるね。
お姉ちゃんは、私の習い事の送りむかえをお母さんがいない時してくれた事もあつたよね。お姉ちゃんのことをみて、みんながすこくうらやましがっていたよ。だから、お姉ちゃんがいてよかつたと思うよ。

お姉ちゃんとはいろいろな思い出があるね。楽しかったこと、つらかつたこと、おもしろかつたこと、ケンカしたこと。どれもこれも私のすこくいい思い出になったよ。これからも、夫婦仲よく、支え合つてがんばつてね。私もお姉ちゃんみたく、やさしく思いやりのある人になれるようにがんばるからね。
ありがとう。お姉ちゃん。

入選 高学年の部 長生きしてね…ひいばあちゃん

栃木県
宇都宮市立泉が丘小学校 六年

千葉 汐音

「そおんなに力はいれなくつたつてもいいんだよお」。五月になると、ぼくたち家族は毎年、ひいばあちゃんの家の裏の竹林でたけのこ掘りをする。ぼくが小学校二年生に入學した年の春、ひいばあちゃんが、ぼくにたけのこ掘りを伝授してくれた。ぼくのひいばあちゃんは、もうすぐ九十才。五年前まではたけのこを掘るのが、ぼくよりずっと早くて上手だつたけれど、今は腰が痛くて掘ることができない。だから、家族・親せきが入れ替わりで、毎日竹林に顔を出すたくさんの春の恵みを掘り出す。「おお！頼もしいなあ」などとぼくをおだてながら、道具の使い方や力の入れ方を教えてくれた。

ひいばあちゃんは広い畑でいろいろな野菜を育てている。冬には、「ほうれんそう、持つていくかい？」…ぼくが「うん」と返事をする前にかまや一輪車を準備し始めるので、ぼくは慌ててひいばあちゃんのあとについて畑に向うのだつた。収穫をしながら、戦争中のことやぼくの先祖の話を始めると話が止まらなくて、気がつくとも大根やにんじんやほうれんそうが、輪車からくずれ落ちそうなくらいの山になり、夕方の陽に照らされ長い影ができていた。ひいばあちゃんのしわくちやな顔や手には、たくさんの苦勞や思い出がまつているんだなあと思つた。そして、痛む腰や足をかばいながら一生懸命に育てた、いびつな野菜たちが愛おしくさえ見えた。

ぼくが遊びに行くと「汐音くんは、ひいばあさんの自慢のひ孫だよ」と、何度も何度も言うので、ぼくはちよつと照れくさくなつて、いつも「もういいよ」と走つて逃げてしまふ。そして、裏山に行つて虫取りや石探し、前の田んぼで生き物採集をするうちにあつたという間に帰る時間がきてしまふのだ。でも、今度ひいばあちゃんの家に行つたら、「ひいばあもぼくの自慢のおばあちゃんだよ」と伝えたい。だつて、たけのこ掘りや漬物作りの名人だし、おいしい味の野菜を作れるし、ぼくの家の方では見たこともない位の大きな花を咲かせるし、九十才になる今でも習字や絵画や文章を書く勉強をしている努力家だからだ。また、学校や塾では教えてもらえないようなことをたくさん教わつた。いろいろな楽しい経験をさせてもらった。昔の古い家のことや、夏の夜には数えきれないくらい蛍がいたこと、祖母の小さいころの話などを聞かせてもらった。それはぼくとひいばあちゃんのかげがえのない大切な宝物のような時間だ。そしてその思い出はぼくがこれから成長するための栄養となり、心の枝葉として、生きていくための力となつていくことだろう。

「ひいばあ、ありがとう」。
教えてもらいたいことは、まだまだたくさんあるよ。だからすつと長生きしてね。また遊びに行くから、待つてね。ひいばあちゃん。

佳作

ぼくのまま、ありがとう

滋賀県
東近江市立五個荘小学校一年

古田 千尋

ぼくは、ママが大好きです。まいにち、おいしいごはんをつくってくれたり、きれいにうちのなかをそうじをしてくれたりして、ぼくがきもちよくするようになります。ぼくがきもちよくするようになります。

ぼくのまま、びょういんでおじいちゃんやおばあちゃんのお世話をすることをしてしています。このおしごとは、とてもちがうことがあるので、とてもつかれるそうです。だからぼくは、ときどきおふろで、せなかやかたを、まっさーじしてあげます。ママはとてもよろこんでくれて、ひやくえんくれます。なつやすみのあるひぼくはママとほーむせんたーへかいものにいきました。ママはいりぐちにあるおはなをみえました。そのときぼくはママへのかんしゃのきもちをこめて、もらったおかねでおはなをあげたいとおもいました。

ぼくはかぶとむしをみにいってけるといつてママとはなれました。ママにはないしょでかかってママをびっくりさせようとおもったからです。ぼくはれじへいきました。ぼけつとのなかのおかねをせんぶだして、おみせのひとに、このおかねでかえるはなはありませんかとききました。すると、おみせのひとは、ぼくをなかのおはなのところにつれてってくれました。でもこれはいいですとおみせのひとにいいました。で、おみせのひとはそのおはなをみせてくれました。きれいなおはながあったので、かうのをきめてれじへいきました。おみせのひとは、おはなをきれいなかみにつつんでくれました。ぼくはママにそのおはなを、いつもありがとうといつて、あげました。もうすぐ8がつもおわりですが、あげたおはなはげんきにさいっています。

佳作

ぼくはふかさくきょうのすけ

茨城県

日立市立久慈小学校一年

深作 京之介

ぼくのなまえは、「ふかさくきょうのすけ」といいます。ひらがなでかくと、なんと十もじもあります。

ようちえんのときに、はじめてじぶんのなまえをかくれんしゅうをしました。ぼくは、てがいたくなるくらいがんばってかいたけれど、いつもみんなよりたたくさんじかんがかかってしまいました。おなじクラスのれなちゃん、あつというまにかいていました。みょうじをあわせても、ぼくのはんぶんの五もじだけしかないのです。ぼくは、うらやましくなりました。

どうしておとうさんとおかあさんは、ぼくにながいなまえをつけたんだろう。ぼくは、ふしぎにおもって、おとうさんにきいてみました。おとうさんはわらって、「はじめからながいなまえにするつもりはなかったんだよ。ただ、きょうとふの『きょう』というかんじをつかいたかったんだ。」といました。それで、おかあさんと

「きょう」のつくなまえをあれこれかんがえて、やっと「きょうのすけ」にきまったのでした。 「きょう」というかんじには、おおきいというみがあるそうです。おとうさんは、 「からだがおおきいということではなくて、こころのおおきいひとになってほしいというねがいをこめてなまえをつけたんだ。」

と、おしえてくれました。 ぼくは、じぶんのなまえにそんなみがあることをしって、びっくりしました。おとうさんとおかあさんが、なんにちもかけてぼくのなまえをつけてくれたことも、はじめてしりました。いままでもなまえをかくのがめんどりで、ざつにかいてしまったこともあったけれど、これからはこころをこめてじぶんのなまえをかいていこうとおもいました。 おとうさん、おかあさん、ぼくのなまえをありがとう。

佳作

おじいちゃんありがとう

鹿児島県
始良市立建昌小学校一年

西 花葉

ラジオたいそうのかえりに、おじいちゃんのはたけをみにいきました。ともだちのりんかちゃんが、「トマトがまっかになれてるよ。」

といました。おかあさんたちとみんなで、ひとつずつちぎってたべてみました。

「あまくておいしいね。」

と、みんながいました。わたしは、ほんとうは、あんまりトマトはすきじゃないけれど、とつてもおいしいとおもいました。

わたしのうでのふとさとおなじくらしいのきゅうりやげんこつみたいなピーマンがありました。きれいなむらさきいろのなすびもたくさんありました。どのやさいもせんぶ、げんきモリモリにみえました。

「おじいちゃんのやさいは、やさしいなんだよ。」

と、おねえちゃんがいました。

「やさしいやさいつてなんだろう。」

と、わたしは、おもいました。するとおねえちゃんが、「アトピーのはるなに、おくすりをつかつていないやさいをたべさせてくて、おじいちゃんがやさいづくりをはじ

めたからだよ。」

とおしえてくれました。やさいづくりをしたことがなかったおじいちゃんは、いっぱいべんきょうをして、アトピーのわたしのため、かぞくみんなのために、げんきなやさいをつくりはじめたそうです。とてもびつくりしました。そして、すこくうれしくなりました。

「おじいちゃんのやさしいところがいつぱいつまっているから、やさしいやさいなんだなあ。」

わたしは、ひとりでにこにこしてしまいました。おかあさんが、

「いつもありがとうつておもいながらたべようね。」といいました。みんなにつこりしました。

わたしも、ちよつときらいなやさいもあるけど、これからは、のこさないでしっかりたべようとおもいました。

きつとおじいちゃんのやさしいやさいをたべると、からだもげんきになるし、こころもげんきで、やさしくなれるとおもいます。

おじいちゃん、おいしくて、やさしいおやさいをつくつてくれて、ほんとうにありがとう。

佳作

だいすきなゆきちゃん

福岡県
篠栗町立篠栗小学校一年

堀 未佳

がっこうからのかえりみちにわたしが、おとこのこ

たちに、いじわるをいわれて、いいかえせなくて、くやし

しいきもちと、かなしいきもちで、ぐしゃぐしゃのおお

で、かえつてきたよ。おかあさんは、はなしをきいて、

「だいじょうぶ。きにしないの。」といつてくれたよ。

それでもきもちはおさまらなかつたよ。そこで、わたし

のいもうとは、まどからそとにむかつて、「ねーねに

いじわるいったなー、そっちのほうがうんこじゃー、こん

どゆつたらたたくよー。」と、どなつたよ。おかあさん

とおおわらいしたら、わたしのきもちも、スカツとし

たよ。そんないもうとは、ヒーローみたい。

おかあさんからおこられて、いじけてないでいてい

るときに、いもうとが、はしつてくるよ。「どしたん。」

といいながら、なみだを、いもうとのふくで、ふいてく

れるよ。わたしが、まだまだないても、ずっとそばに

いてくれるよ。とんとんと、いもうとのちいさいで

してもらったら、だんだんわたしのきもちが、おさま

るよ。そしてふたりで、おひめさまごっこをするよ。

むかしは、わたしが、あかちゃんのいもうとをあ

やしていたよ。ぎやくになつたね。

もうすぐ4さいのゆきちゃん、わたしをまもつて

くれて、ありがとう。

父さん、ありがとう

「ナイス、キャッチ。」
今日も、父さんの元気なこえが校庭に大きく聞こえてきます。

ぼくの父さんは、毎日しごとがおわると、いそいでぼくの小学校に走ってきて、やきゅうぶのコーチにへんしんします。

ぼくが、一年生になつた夏、

「父さん、やきゅうぶに入りたいよ。だめかな。」

と言うと、ビールをのんでいた父さんがじつとぼくを見て、「そうか。わかった。わかった。」

と言つて、かんとくさんにおねがいしに、家まで行つてくれました。

二年生にならないと入れないやきゅうぶですが、ぼくを入れるかわりに、父さんもコーチをひきうけてくれるように、かんとくさんからのまれたそうです。

父さんは、しごこのほかにも、牛のせわをしているので、ひきうけるのをまよつていましたが、ぼくのために、よろこんでひきうけたと母さんに、聞きました。

ある朝、ぼくは、目ざまし時計のセットをまちがえて、五時に目をさました。

外はまだ夜みたいに、まつくらで、うちの中は、シーンとしています。時けいの音が、

「チツクタツク。チツクタツク。」と大きく大きく聞こえていきます。

となりにねていた父さんが、どこにもいません。

ぼくは、「あれ。父さん、どこへ行っちゃったのかな。」と思

い、ぱつと、とびおきて、いえ中をさがし回りました。それで

も、父さんは、いません。

また、ふとんにもどつて、気もちよくねていた母さんのかたをりよう手で、なんどもゆすつて、

「ねえ。父さんが、いないよ。」となきそうな顔で言うのと、

「父さんは、牛ごやに行つたよ。」とむねそうなこえで答えました。

「えつ。どうして。」と聞くと、母さんは、ゆつくりおき上がり、ぼくのかたに手を置き、

「しごとがおわつて、夕がたの五時からすくに、りくたちのやきゅうを見に行けるように、いつも父さんは、朝早くおきて、牛のせわと草かりをするのよ。うれしいよね。りく。」

と話してくれました。

「えつ。うつそお。本とうなの。」とぼくは思わず、大きなこえでさげびました。

父さんは、ぼくのために、ねる時間をけずつて、まつくらな中、畑で二日分の草かりをしたり、牛にえさをあげたりしていたのです。

ぼくは、心がキューンとなり、目からぼろぼろなみだがながれてきました。

「いつもは、ぼくにとてもきびしいことは、で、

りく。ごはんをのこすな。」

とおこつたり、いもうととけんかしているときは、こわい顔で、「いいかげん、やめれつて。」

としかる父ですが、本とうはいつも、ぼくのことを考えているやさしい父さん。

ぼくは、これからも父さんとしよにがんばるよ。ありがとう。

佳作

じいちゃん、ありがとう

「おかえり。きょうもがんばつたなあ。」

学校からかえると、じいちゃんがぼくをむかえてくれます。そんなじいちゃんのにこにこわらつた顔を見ると、ぼくはほつとします。

ぼくのじいちゃんは、八十二さい。でも、とつても元気です。ごはんをいっぱい食べていつも大きなこえでわらつています。

ぼくは、おかあさんのしごとのかんけいでまい日じいちゃん

のいえへかえります。よるまで、じいちゃんといっしょにしゃくだいをしたり、ボールであそんだりします。じいちゃん

は小学生のころ、けいさんがとくだつたそうです。ぼくにも

「ちようめんかしてみる。じいちゃんがよく教えてあげるぞ。」

といつて、たしぎんをなんかいも教えてくれました。テストで百点をとつてじいちゃんにみせると、すごいなあ

と喜んで頭をくしゃくしゃにやんでくれます。

夕ごはんをつくるのも、じいちゃんのでばんです。とく

なりようりはカレーで、おかあさんのカレーより、あまくておいしいです。

「じいちゃんのカレーは、さいこうだね。」

というと、ぼくのおにいちゃんが小さいころからつくつていたので

じょうずになつたんだよと教えてくれました。ずっとカレーをつくつているなんて、じいちゃんの手はまほうの手

で、ゴックさんみたいです。すごいなあと思います。

いつも元気なじいちゃんだけど、しんばいなこともあります。それはじいちゃんの体のことです。きよ年の夏、頭とくびのけつかが細くなつて入いんしました。

ぼくは、じいちゃんのぐあいが変わつたのは自分のせいだと思ひました。ぼくがふざけてじいちゃんのせなかにのつたり、

ボールあそびで、いづばいはしらせてしまつたりしたからです。

ぼくはこころの中でずつと、(じいちゃんごめんね。もうむちやをいわないから。かみさま、ぜつたいじいちゃんを元気にしてね。)と思つていました。ドキドキしながらおみまいにいきました。びようしつに入るとき、ぼくはゆう気を出して

「ごめんなさい。だから元氣になつて。」

とあやまりました。するとじいちゃんはびつくりしたあと大わらいして

「たいがといるから、元氣になれるんだよ。」

と、あく手をしてくれました。じいちゃんの手は、いつもとおなじ

で大きくてあつたかくて、ほつとしたことをおほえています。

大すきなじいちゃん、いつもぼくのためになんでもがんばつてくれてありがとう。いつも、元氣をいっぱいくれてありがとう。

元氣なじいちゃんが、これからもずつと元氣でいられるように、

今、今はお手つたいをがんばるよ。大きくなつてじいちゃんへおんがえしができるまで、ずつとずつと長生きしてね。

おとうさんありがとう

鹿児島県
薩摩川内市立協和小学校二年

坪内 蘭丸

ぼくはおとうさんと二人でくらしています。ぼくのおとうさんは、カンパチという魚のようしよくをしています。いつも朝早くからしごにでかけます。毎日魚にえさをやるためにふねにたくさんえさをのせて、おきにあるカンパチが入ってるいけすに行きます。二年かけて、魚を大きくするためにがんばっています。生ものなので、そだてるのにたいへんくろうしています。また、たいふうなどのときは、かえりがすごくおそくなります。そんなときは、ぼくはおとうさんのことがしんぱいになります。でもおとうさんは、つかれてるのにもいつもえがおでかえってきます。それを見るとぼくは、うれしくなります。しごとがおわるといえのことをしてくれれます。そうじをしたり、ごはんをつくってくれます。そうじのときは、ぼくもかたづけをてつだつたりします。りょうりをつくるおとうさんののつだいもします。ごはんは、とつてもおいしいです。

休みの日には、ぼくをあそびにつれていってくれます。公園に行ったり、ゲームセンターにつれていってつくれたり、買い物に行きます。公園では、おとうさんもいっしょに

なつてすべりだいをしたり、ボールあそびをしたりしてくれます。ぼくは、そのときとつてもうれいいます。買い物に行くときは、おとうさんとなにを買うか考えながらいものするのが楽しいです。

でもぼくは、そのあとおかしをかってくれるのが、ちよつとしたのしみです。おとうさんは、えがおで「いいよ。」

といつてくれます。

また、ぼくがしゆくだいをしてるるときも、いっしょになつて、勉強を教えてください。もんだいがとけたときは、ほめてくれて、むずかしいもんだいのときはやさしく教えてください。だからしゆくだいのまいにち楽しいです。

いつもおとうさんは、やさしいけど、おこるときは、すこくこわいです。ぼくがものをかたづけないうるときや、ことばづかいがわるいときは、おにみたいにこわいです。でもおこられるけど、そのあとはずごくやさしくしてくれれます。ぼくは、おこつてくれるおとうさんも大すきです。

毎日、しごともいそがしいけど、ぼくのことをたいせつに思っているおとうさんにかんしゃしています。

佳作
いつもありがとう鹿児島県
薩摩川内市立可愛小学校二年

福浦 帆乃夏

「竹のこほりに行くよ。」

四月の休みの日におじいちゃんが言いました。おじいちゃんには、わたしと弟をいろんなところへつれていってくれます。わたしは、わくわくしながら、三人でおじいちゃんのトラックのりしました。

ついたところは、おじいちゃんの友だちのいえでした。そこには、長い竹がいつばい生えていて、ちゃ色のようふくをきたようなものも生えています。おじいちゃんとおじいさんは、せのひくいちゃ色の竹のこを切りはじめました。わたしは、せの高い竹のこのほうがいつばい食べられるのと思つて、おじいちゃんに、

「こつちにも 竹のこあるよ。」

とつうと、

「大きいのはね、かたくて食べられないんだよ。」

とおじいちゃんがやさしく教えてくれました。

「竹のこは、せが高くなつて竹になるから、もう、竹の子ともじやなかったんだ。おにいさんくらいかな。」

つて言いながら、わたしと弟はトラックのにだいにきょうそうしながら、竹のこをせました。

おじいちゃんのいえにかえると、

「いつばい、とつてきたね。」

おばあちゃんがなべをもつてにわにでてきました。

「ほら、こつやつてかわをむくのよ。」

と、竹のこの上に切りこみを入れて、下のほうにサーツとむいて見せてくれました。わたしも同じようにやろうと思つたのに、かたくてなかなかじょうずにできません。かわは、ざらざらしていて、竹と同じにおいがしました。少しづつ、むいていくと、はだ色の竹のこが見えてきました。楽しくて、私は、五本。弟は、二本むきました。

おばあちゃんが、なべの中に水と竹のこを入れて、ゆでました。

「さめてから、もつてかえりなさい。」

と、おばあちゃんが言いました。わたしは、早く自分でむいた竹のこが食べたくて、まだかなあとなべをのぞきました。

「あれっほかのやさしいは。」

「まだよ。竹のこは、一回ゆでてから、りょうりするのよ。」

と、おばあちゃんがやっぱりやさしく教えてくれました。

いえにかえつてから、お母さんがやさいと、とりにくと、竹のこで、りょうりしてくれました。まちにまつた、わたしの竹のこは、口の中でシャキ、シャキいい音をならして、

「やつとあえたね。ほのかちゃん。」つて言つてるような気がします。

わたしにとつて竹のこは、やさしいおじいちゃんおばあちゃんのあじになりました。おじいちゃんおばあちゃん、わたしを竹のこにあわせてくれてありがとう。二人のおかげで、わたしはいつもいろんな楽しいことに出あえます。ありがとう。

佳作

わたしの元気なおじいちゃん

東京都
葛飾区立道上小学校三年

大町 彩葉

それは、朝の読書タイムの時。だけれが、「あのおじいちゃんだれた。」

と言った。わたしはふりかえると、おじいちゃんが、教室の中のぞいでいた。あわてておじいちゃんの所へ走って行き、聞いた。「どうしたの？」

「お習字のゴミぶくろわすれたって、ママが言ってたから。」

と、ポケットからビニールぶくろを出して、わたしにくれた。わたしは心の中で『ありがとう。』と思っただけ、おじいちゃんには、てれくさくて言えなかった。

学校から帰って、ママに聞いた。

「おじいちゃんは？」

「たぶん、さん歩だよ。」

そう、うちのおじいちゃんは、七十八才なのに、毎日二時間もさん歩するくらい元気なのだ。じゅぎょうさんかんとくん動会は、学校で一番に来てくれるし、夏休みのラジオ体操そうには、いっしょに行ってくれた。ちよつとおもしろい体そうだったけど、習い事に行く時も、自転車をわたしに負けないスピードでビュンビュンこいで行く。わたしが小さいころは、おじいちゃんの後ろにのつて、遠くの公園までつれて行つてもらったをおぼえている。とてもなつかしい。

でもすきな所ばかりじゃない。イヤな所もある。それは、きれいすきすぎる所とごはんの時のしせいにきびしい所。すぐに、

「ゴミない？」

と聞いてくる。ものすごくおもしろい所もある。オナラの話が大好きで、いつも、

「オナラをがまんすると体にわるいから、がまんせず、大きなオナラをしる。」

と言う。

こんなに元気でおもしろいおじいちゃんだけど、ちよつと心配な事もある。きよ年に左足を手じゅつして、今度は、右足を手じゅつするよていだ。前のとき、たいいんして、足をひきずっていたので、わたしが、「いたいの？」

と聞くと、

「いたくなんかないよ。」と答えたけど、顔が少しかなしそうだった。自転車にもれなくてさびしかったけど、しばらくして、またいつもの元気なおじいちゃんになってくれたので、すこうれしかった。「本当によかった。」と思った。

だから、今度もぜったい大じょうぶだと、しんじている。そして今度は、今まで言えなかつたけど、

「おじいちゃんいつもありがとう。手じゅつがんばってね。また、公園行こう。いつまでも自転車をこいでいる元気なおじいちゃんできてね。」

と言いたいと思う。

佳作 ババの まほうの手

兵庫県
雲雀丘学園小学校三年

真鍋 安夕

「ではテストを返します。」

先生がひややかに言った。どきんとむねがなった。丸められたテストを、席でおそるおそるひらく。二こもまちがえていた。七点もひかれていた所もある。どうしよう。目の前がまっ暗になり、みんなの声が小さくなった。その時、(あつそうだ！今日はババが来る日だ。ババに相談しよう。)わたしはやつと少し元気をとりもどした。

ババはママのお母さんで、みのおという所に住んでいる。めがねをかけていて、動物にたとえるとふくろうだ。きびしいことも時どきいうけど、いつもわたしをえだにとまって森を見守っているふくろうの様に見守ってくれている。鼻はかぎの様な形をしていて、学校にババがむかえにきた時、学校の子に、「あつ、まほう使い！」といわれた事もある。わたしが元気な時は電話は一日に一回しかかけてこないけれど、病気の時は一日に何回もかけてきて「体温は何度か。」とか、「食よくはあるのか。」とか心配する。わたしがおちこんでいるときや、しんどいときなどは、ババはわ

わたしの足をさすってくれる。そのいも虫の様な手でさすってもらうと、何だか心がおちつくのだ。

学校がおわって、重い足どりで教室をでた。校門の所に、ババのおどっているすがたがみえた。わたしが走っていくと、ババはニコニコしながらよつてきて、わたしの手をにぎり坂をおりた。帰ってくると、ママにきこえないように、「いっしょにトイレに入つて。」とたのみ、ババと二人でトイレに入り、かぎをかけた。テストの事をうちあけると、ババはニヤニヤしながら「ママは二つまちがえたくらいではおこらないよ。」といつてくれた。わたしはホツとしてかぎをあげ、ババといっしょにトイレからでた。結局おこられてしまったけれど、ババはだまっで、あいのいも虫の様なきもちのいい手で、足をさすってくれたので、悲しみやくやしきの雲が、ゆつくり晴れていく様に思えた。

ババ、まほうの手で、わたしをいつも元気にしてくれて、ありがとう。

いつもありがとうお母さん

千葉県
我孫子市立並木小学校 四年

上松 七海

私は学校に忘れ物ばかりする。いつもちゃんとしたくをし
たつもりなのに忘れてしまう。

四年生になって先ず、筆箱を忘れた。筆箱を持ったと思っ
たのに、今度は、筆箱の中の消しゴムを忘れた。筆箱はカン
ペキだったのに、今度は算数で使うコンパスを忘れた。忘れ
たと言うより私はなくしてしまったのだ。

書道の時間に習字道具を忘れた。夏に入ると、プール道具
は持ったけど、プールのほうしを忘れた。運動会でなりたかつた
放送係になったのに、セリフのファイルを忘れて頭の中がまっ白
になった。山登りの遠足で水とろうを忘れたこともある。給食
ぶくろを忘れて、わりばしで食べることもしょっちゅうだ。

私の悪い所は、これだけじゃない。毎日毎日つくえの上を
かたづけると言われている。消しゴムのカスは、山のようにつ
くえになつていて、まるでふじ山みたい。えん筆はけずつたま
まカスを捨てないから、いつもえん筆けずりがいっぱい。ラン
ドセルの中も、お道具箱の中も、いつもぐちゃぐちゃでおこら
れている。とうぜんお母さんはおこつてばかりいる。いつも私
が忘れ物をするたびに、朝かみの毛はぐちゃぐちゃで、もの
すごいスピードで自転車に私にむかってくる。ガミガミ言わ

れるのかと思うと、お母さんは、
「気をつけていつてきなさい。しっかりしなさい。次、忘れ物
をしたら、もうとどけないからね。」

と言うだけで、また妹と弟がまっつ家にすごいスピードで帰って
いく。お母さんは、いつもいつも私の事を想ってくれている。忘
れ物にすぐ気がついてくれるのも、私がやりっぱなしのもの、お
母さんがいつも私を見ていてくれる。ただ、やっぱりもう
忘れ物はしたくない。お母さんの朝はすこいそがしい。お
仕事もある。お家のこともやる。書道の先生だから、お母さ
んの手はいつもすみだらけだ。顔にまでついている時もある。
妹と弟もいる。でも、私が帰るとお母さんはいいつも、笑顔で

「お帰りなさい、つかれたね。」

と言ってくれる。私をせめない。私がない事を相談しても、
お母さんは、私の事をしんじているから、私の思うようにやれ
ばいいいつも言う。お母さんは、私の宝物だ。私は、お母さん
みたいになりたい。だからこれからは、忘れ物なんてしないよ
うにする。ちゃんとかたづけもするようにする。だつてお母
さんは、私がかつとできるつてしんじてくれているんだもん。

佳作

わたしのたから物

広島県
東広島市立西条小学校 四年

山下 桃佳

「これ、さわちゃんよ。」
四さいになるわたしの妹は、いつもこう言つて、何でも自分の
物にしてしまいます。

「わたしの物なのに、どうして!?!」
妹は、本当にずるいです。

今日もいつものように、わたしと妹のケンカが始まりました。
原くんは、スイカです。スイカを二しょに食べていて残りが少なく
なつてくると、食べるスピードがどんどん速くなり、最後は、

「これ、さわちゃんよ。」

と言つて、いつものようにお皿ごと取りこむのです。で
も、わたしは、心の中でグツとがまんし続けるのです。
今度は、わたしと妹が、それぞれおばあちゃんに買って
もらったえん筆を

「これ、さわちゃんよ。」

と言つて、わたしの分まで全部取っていきました。さす
がに、わたしもがまんできなくなり、

「これは、わたしの物よ。」

と言いつ返して、無理矢理力づくで取り返しました。す
ると、妹は、大泣きになり両親を味方につけます。いつ
もこの手で、わたしは負けです。

ある日、わたしが風ぜをひいて、高熱を出してねてい
ました。そこへ妹がやって来て、心配そうな顔をして、
「ももちゃん、大じょう夫？なかつたら一ぱい遊ぼうね。」

とやさしく声をかけてくれました。わたしは、その言
葉を聞いて、熱のこともわすれ、飛び上がるほどうれし
かったです。その時には、もうケンカのことなど頭の中
にはありません。妹のやさしさにふれ、いつも言い返す
わたしも悪かつたなあと反省しました。

実は、わたしは、る守番が大キライです。一人である守
番をしていると、いつもは聞こえない音が次つぎと耳に
飛びこんできて、こわくて仕方がないのです。それなの
に時どき、両親は、わたしにる守番をさせます。そんな
時も妹は、わたしのさみしい気持ちに分かるのか、
「一しょにる守番しよう。」

と言つてくれるのです。わたしは、とてもうれしくなり
ます。る守番をしている間は、ブロックやおままごとで
遊ぶことをようきゆうされますが、妹が一しょにる守番
をしてくれるだけで安心です。

いつもささいな事で一ぱいケンカしていますが、やつぱ
り妹は、わたしのたから物です。わたしがふあな時でも
明るく元気をくれるので、魔法をかけられているみたい
です。ケンカをしてもお思議なことに、すぐに仲直りでき
るのです。いつもわたしに笑顔と元気をプレゼントし
てくれる妹が、わたしは本当に大好きです。

さわちゃん、ありがとう。

「ぼくのお母さん」

愛知県
江南市立門弟山小学校 四年

波多野 希陽

ぼくのお母さんが、おこるときは桃太ろうに出でくる鬼でもこわがるくらいおそろしい。だけどぼくがいろいろしていると、お母さんはニコニコだ。いつもニコニコでいてほしいけど、いつもぼくががいい子でいるのは大変だ。

ぼくのお母さんは料理が上手だ。ぼくはお母さんの料理ならなんでもおいしい。夏休みのお昼ごはんは、そうめんばかりだ。だけど、やくみがしょうがになったり、わさびになったりする。いつも同じそうめんだと思うけど、「なっ、おいしいやろ。」といわれるとそうかなあ、と思えてくるからふしぎだ。

ぼくのお母さんはおもしろい。ひとつめはいつもおもしろいことをいってぼくをわらわせてくれる。けどちょっと下品だなあと思うときもある。ふたつめはおもしろいことを、むいしきでやる。前はスリッパを種類がちがうのをはいていた。きのうは、ゴキブリホイホイをふん

づけておかあさんがゴキブリホイホイにひっかかっていた。ぼくは「あーあ」とためいきをつく。

ぼくのお母さんはラジオをやっている。たくさんのリナーさんがお母さんのラジオ番組にメールをおくってくれる。聞いているだけでおこっている人も笑えてくるまほうのラジオだ。それはぼくのじまんだ。

ぼくのお母さんは、いいことをいう。たまに。ほんのたまにだけ。ぼくがこの作文をかいている時だって「文字数じゃないやろ。ありがどうの気持ち伝わるように書けばいいよ。」といった。お母さんに書いているのに。

ぼくのお母さんはすごく強い。一回も病気にかかったことがない。それ以外でも強いけど。ぼくもそんな強い人になりたい。

ぼくはそんなお母さんが好きだ。お母さんいつもありがどう。

佳作

「お父さん、今までごめんなさい」

愛知県
尾張旭市立旭小学校 四年

藤井 悠

私の父は、毎日、作業服を着て、仕事に行きます。

油圧式フォークリフトのサービスマンです。お客さんから機械が動かなくなったと言われると、父の仕事の始まりです。機械は、油圧式なので、たくさんの油を使います。だから、父が帰ってくると、独特の機械の油の臭いがします。とてもくさいです。お風呂に入っても、手の指紋の中に入りこんでいる油までは、とれません。私はとても嫌でした。

近所のお父さんは、スーツを着て、さわやかな顔で帰ってきます。うらやましかったです。

母が洗濯をしている時も、父の油まみれの作業服があると、別の洗濯機で洗ってほしいと思っていました。

私は、父が大好きです。でも汚れて帰ってくる父は、嫌でした。

一度だけ、油まみれの父に向かって、「くさい」と言った事があります。でも父は、怒らずに、「ごめん、すぐにきれいにするから」と言ってお風呂に行きました。とてもさみしそうな背中をしていました。私は、言っ

いけない事を言っていました。

ある時父は、私の習い事に迎えにきてくれました。作業服を着て、トラックに乗って…。急に、スコールのような大雨が降ってきました。父は私をトラックに乗せると、自分は、機械がぬれないように、荷台にシートをかけたしました。まるで、私の事を抱きあげてくれる時のように、大事そうに…。

私はその時感じました。父の仕事に対する情熱を…。私は今まで、父の仕事は、かっこわるいと思っ

た。私や母の為に、毎日、油まみれになって働いてくれているのに、本当に悪いことをしていました。ごめんなさい。でも、本当に悪いと思っ

ているけれど、なかなか言えません。恥ずかしいです。だから手紙にしたいと思います。「お父さん、仕事ごころう様。くさいと言っ

見送り、ありがとう

福岡県
福岡市立東月隈小学校五年

是永一樹

七月のある日曜日、ぼくは父と姉の三人で年に一回の、町内会の清掃活動に参加しました。毎年両親が参加していますが、今年は母が用事で行けませんでした。そこでぼくと姉が行くことにしたので。

とても暑い中、草むしりを頑張っていると、「君たちのお母さんは立派だね。」

と、近所のおじさんに声をかけられました。ぼくが汗びっしょりになって頑張っているのに、どうして母がほめられるのか、不思議に思っているとおじさんは

「君たちのお母さんは、毎朝登校する君たちを、姿が見えなくなるまで、庭から見送っているやろ。そんなお母さんは、なかなかおらんよ。」

と、にっこり笑って言いました。ぼくは暑さを忘れるくらい、びっしょりしました。ぼくにとっては当たり前のことだったからです。

言われてみれば、母は毎朝ぼくを見送ってくれます。ようち園の時には、スクールバスが見えなくなるまで、手をふってくれました。小学校に入学してからも、ぼくと姉の後ろ姿を、ずっと見送ってくれました。今年の春から姉が中学生になったので、家を早く出るようになったけど、一人ずつちゃんと見送ってくれます。暑い日も、寒い日も、雨の日も、毎日です。家からまっすぐ歩いて、曲がり角の所で振り返ると、豆つぶくらいに小さくなった母が、大きく手をふってくれます。ぼくも力いっぱい

手をふって、角を曲がります。その日の晩ごはんの時、母におじさんの話をしました。すると母は

「それはお父さんのおかげよ。お父さんがお母さんの分も働いて来てくれるけん、お母さんが朝ゆつくり見送ってやれるとよ。だからお父さんを立派に育ててくれた、おじいちゃんとおばあちゃんにも、感謝せないかんね。」

と、言いました。でも父は、

「いやいや、いくら時間があっても、気持ちが無かったらでんけんね。お母さんの優しさよ、そういう人に育ててくれたおじいちゃんとおばあちゃんのおかげぞ。」

と、言いました。姉がニヤッと笑って

「ビュービュー。お父さんとお母さん、ラブラブやん。」

と、ひやかすと、母が

「当たり前やん。うらやましからうが。」

と、自まん顔をしました。家族四人がドツと笑いました。ぼくは何だか、とても幸せな気持ちになりました。両親にも、おじいちゃんおばあちゃんにも、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとう。

清掃活動は暑くて大変だったけど、おじさんのおかげで大切な事に気付くことができました。二学期からは母の見送りに、家族みんなの思いやりを感じることで、きそうです。この思いやりを見送られて、これからの母がどうの心で頑張ります。

佳作

ひいばあちゃん、ありがとう

愛媛県
上島町立岩城小学校五年

田名後友

「ひいばあちゃん、おはよう。」

朝、ぼくは、耳もたで言います。ひいばあちゃんは、耳が聞こえにくいので、大きい声で言います。すると、ひいばあちゃんは、

「とんちゃん、おはよう」

と言ってくれます。

ぼくが、朝起きて、一階へ下りてくると、ひいばあちゃんは、いつもの席に、いつものようにすわっています。そのすがたを見ると、ぼくは、ほっとするのです。

ぼくには、一才の弟がいます。ひいばあちゃんは、弟の遊び相手です。おもちゃで遊んだり、弟に合わせて会話を楽しんだりしています。弟とひいばあちゃんの年の差は、百もありです。ひいばあちゃんは、明治の終わりごろに生まれ、大正、昭和、平成と生きてきたのです。

ぼくとは、九十才も年の差があります。小さいころには、ベビーカーに乗せてもらい、いろいろな所を散歩しました。また、よくうでずもうをしていました。ぼくが、三年生のころです。ぼくは、勝てるだろうと思っていたけど、負けてしまいました。

祖母や両親にしかかれていた時には、

「そんなに良かったらいいかん。」

と止めてもくれます。また、げんかんのぼくたちのくつがみだれていると、ついで上手になおしてくれます。このように、ひいばあちゃんは、ぼくたちのことを第二に考えてくれるやさしい気持ちの持ち主です。

ぼくが、とても感心するのは、毎日、毎日、ずっと新聞を書き写していることです。なんと二十六年間も続けているのです。ぼくは、すごいなあと思います。

このように考えると、ひいばあちゃんは、これまで、たくさんのことを教えてくれていたことに気づきます。言いたいこともあったら、それをあえて言わず、ぼくたちの気持ちが一番に考えてくれていたのです。そう思うと、「ありがとう。」の気持ちでいっぱいになります。つらいことがあっても、ひいばあちゃんのやさしさに包まれると、気持ちも軽くなり、それまでしんどかった心が、なんだかやさしくなるような気がするのです。ぼくにとって、弟にとっても、ひいばあちゃんは、心を勇気づけてくれる大切な人なのです。弟は小さいからまだわからないだろうけど、大きくなったら、ひいばあちゃんの心の大きさに気づくと思います。

ひいばあちゃん、いつもありがとう。これからも、ぼくをほっとさせるそんざいでいてください。長生きしてください。ありがとう。

ありがとうの理由

「はい。」ぼくは、コーチの言葉を聞いてそう返事をするのが精一杯だった。ぼくは、七月に行われた、県サッカー協会のトレセンを初めて受けた。同じチームで同級生のワタルと一緒に。その結果が良かったのだ。ワタルは、合格、ぼくは、不合格。

毎日、コーチに「勝って泣け！勝って泣くほど努力しろ！」と言われているけど、やっぱり、悔しくて泣いた。コーチは、「次、頑張るんだ。」と語ってくれた。でも、ぼくは、毎日、自主練に付き合ってくれているお母さんに、言いづらくてその日は、「ただいま！」と、いつもより大きな声で家に帰った。

ぼくは、泣き顔を見られたくなくて、すぐにお風呂場へ行った。お風呂に入ると、台所のお母さんに聞こえるように、大きな声でイナズマイレブンの歌をうたった。夕飯を食べ終わると、お母さんが「花火しようか。去年から置きっぱなしだけど大丈夫かな。」って言いながら、お父さんと二人で準備を始めた。いつも、九時過ぎたら、近所迷わくになるからって、花火をしないお母さんが珍しく張り切っていた。

「花火、し気ってなくて良かったね。」お母さんは、花火をしているぼくの顔をなでた。

「お母さん、ぼくね。」と言いかけたとたん花火が消えてシーンとなった。また言いづらくなった。でも、ぼくは思い切って言った。

佳作
たくさんのありがとう

「トントントン！」今日もばあばがキッチンで料理を作ってくれています。

ぼくは、ばあばの料理がとても大好きです。特に大好きなのは、オムライスです。どうして美味しいかというところ、卵が新鮮で、とろっとふんわりとしていて、ケチャップソースがスパゲッティの残りのルーを工夫して、オムライスをソースに変身させて食べるのが最高に美味しいのです。これだと毎日でも、オムライスが食べれそうです。

ぼくの家は、両親が働いているため、ばあばが週に二回ほど、ぼくの家に夕飯を作りに来てくれます。

ばあばは、ぼくによく、

「ほんまに、よう和歌山に帰って来てくれたなあ」と、言います。

ぼくは、お父さんの仕事の都合で、小さい頃は、ばあばの家から遠くはなれた場所に住んでいたため、ばあばに会う事が出来ませんでした。会えても年に一回程度。それが、ぼくが三年生の時にお父さんが転勤になったため、ばあばのそばに居られるようになりました。

遠くにいる、会えない時でも、電話をくれて、体を気付かせてくれたり、みかんや桃や手作りの梅ジュースを送ってくれたりもしました。いつも、ばあばは優しいのです。そんなばあば

「県トレのメンバーに選ばれなかった。」すると、お母さんは「そのくらいなんなのよ。次がある。それより泣きたい時はお風呂の中でもいいけど家族の前で泣け。」と言った。

「知ってたんだ。」ぼくは、ほっとして、わんわん泣いた。また、お母さんが言った。

「きつと、コーチのお父さんが一番言いづらかったんじゃないの。」

「そっか！」ぼくは、コーチであるお父さんの顔を見た。お父さんの目は赤くなっていた。

「泣いたらすすきりするな！」お父さんはそう言って笑った。その日、たくさんのコーチたちがはげましてくれた。

「気にするな！」って中尾コーチ。

「辛い時はうまいもん食え。」って畑で作っているメロンをくれた辰田コーチ。

「あの時選ばれなくてよかったって思えるくらいに努力で自分をみがけ。」って国房コーチ。お父さん、お母さん、それからみんな、ありがとう。次のトレセンは、頑張る。ワタルには負けない。ワタルより強くなってみせる。そして、次のトレセンには、ワタルと一緒に選ばれたい。

お父さん、お母さん、こんな小さなぼくに色んなきもちを色んな方法で乗りこえる強さを教えてくれてありがとう。そして、はげましてくれる人がいることの幸せも一緒に教えてくれる、お父さんとお母さんの子供で、ぼくは、本当に良かった。ありがとう。

の近くにこれた事は、ぼくにとってもうれしいことです。

でも、いつも「ありがとう」と言うタイミングがなく、なかなか感謝の気持ちを伝えることが出来ません。

だから、ぼくは毎年ばあばの誕生日にたくさんのありがとうを込めて、三年生の時は、画用紙に家族の写真の切り抜きをはり、メッセージをそえて上げました。四年生の時は、ばあばの似顔絵をはり絵で作りました。四年生の時がプレゼントした物は、きちんと額にかざられ、目に入る場所にかっこよくかざられています。

いつもばあばは、目にたくさんの涙をためて、「あっちゃん、ありがとう、ほんまにありがとう。」と、とても喜んでくれます。

ぼくが、本当は、ばあばにありがとうなのだと思うけれど、喜んでくれてる顔を見ると、プレゼントして良かったなあと思う時です。

「ありがとう」は、心が温まり、気持ちのいい言葉だなあと思いました。

今年も八月十三日はばあばの誕生日、去年ばあばに上げた顔のはり絵の横に、たくさんのありがとうを込めたプレゼントをかざってもらいたいのです。

ばあばいつも本当にありがとう。

佳作 笑顔をありがとう

わたしの家は六人家族です。おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さん、そして、わたしと弟、六人全員そろっているのがあたりまえでした。しかし、今年の二月にお母さんの具合が悪くなりました。わたしは去っていく救急車を見つめながらぼうぜん立ちつくしました。昨日まで、あんなに元気だったお母さんが入院するなんてとおどろき、これからのことが心配でたまりませんでした。

お母さんがいない生活は、とてもさみしく、わたしより小さい年下の弟はいつも元気がない顔をしていました。でも、さみしさを口に出さずにがんばっている弟を見て、姉のわたしがしつかりしないとイケないと感じました。また、おばあちゃんは一生命ご飯を作ったり、洗たくをしたりとわたしたちの身の回りのお世話をしてくれました。おじいちゃんも弟の身の回りのお世話をしてくれました。お父さんは弟のようち園のおむかえをしてくれました。お母さんは仕事の合間にお母さんを見舞い、わたしたちにお母さんの様子を聞かせてくれました。仕事はいそがしいけれど、ときどき早く帰ってきてくれてわたしと弟が少しでもさみしくないようにしてくれました。弟は小さいながらもさみしるのときに一人で頭や体を洗ったり、次の日に着る服を用意したりと、自分で考えながらできることをやっていました。おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、そして弟がそれぞれ

佳作 チエンジ

ある日お母さんが、「親子を交代しないか」と言ってきた。お母さんは家事がきらいだからだろうと思っただけ、ぼくは、「交代する」と喜んで答えた。なぜなら交代すれば夕飯は好きなものが食べられるし、勉強もやらなくてすむと思ったからだ。「なら、いつから交代する？ 今から？」「じゃあ明日の朝からにしよう。」「でも明日の朝、部活はほくのかわりにお母さんが行くってこと？」「そうね。」「でも休まず行けば最後の日にジュースがもらえるかもしれないから、お母さんじゃだめだよ。」「じゃあ帰ってきて十時から交代ね。」お母さんがうれしそうに顔をしていたので、ぼくもなんだか楽しそうだなあ、と思った。部活が終わって家に帰ると、お母さんが、「早く、交代するよ。」と洗たくを干している途中で言った。ぼくは洗たく干しから交代するのがイヤだったので、「ちよっと待って。チエンジって言ってタッチしないと交代はできないの。」というとお母さんは、無理やりぼくを押ししたおし、タッチしてしまった。そのしゅん間お母さんとぼく

茨城県
常陸太田市立金砂郷小学校六年

小磯 日菜

に協力し合っている姿を見て、わたしも自分に何ができるかと考えました。わたしにできることは、弟のためにお母さんのかわりになつてあげることだと思いました。弟によるち園での出来事を聞いてあげたり、遊び相手をしてあげたり、ねる前に絵本を読んであげたりしました。弟が悲しい顔でいるよりも笑顔でいた方がうれしかったからです。

お母さんの入院を通して、ふだん当たり前に過ぎていく日々の生活が一人でも欠けると大きく変わってしまうことを知りました。おじいちゃんとおばあちゃんがわたしたちを気づかせてくれたことで、お母さんがいない生活の不安がなくなりまし。おじいちゃん、おばあちゃん、お父さんがいてくれることができて、お父さんがいたから、わたしも弟も笑顔でいることができて、お父さんありがとう。弟がさみしくないようにとそばにいてあげたつもりでも、本当は弟がそばにいてくれたからわたしがさみしくなかつたと思います。りゅうくんありがとう。

お母さんの「おはよう」で始まる一日がわたしは一番好きです。わたしの中でお母さんの存在がどんなに大きいか、お母さんが入院したことで気付きました。お母さん、体に無理をしないでこれからは家族のために笑顔でいてください。おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さん、そして弟、いつも明るい笑顔をありがとう。

千葉県
我孫子市立根戸小学校六年

上田 恭平

は入れかわってしまった、結局洗たくを干すところからお母さんの仕事をやらされてしまった。干している間にお母さんが昼ごはんは、何にするのか聞いてきた。「昼ごはんはぼくが作るの？」

「当たり前じゃん。」
ぼくはめんどうくさい、と思ったけど作った。夕飯のおかずは、フライドポテトとハンバーグにしたいと思った。バターロールとひき肉とレタスを買って来たけど、作り方がわからなかったのでお母さんにハンバーグの作り方だけ紙に書いてもらった。その間お母さんには、勉強をさせた。

「一日4ページはドリルをやらさないといけないんだよ、まず漢字をやりなさい。」
お母さんはいやな顔をしたけどやりはじめた。「きらいな科目は2ページやりなさい、エーっていったらページ増やすよ。」
とぼくは言った。だって、お父さんと毎日やる約束をしたのだから。

料理をつくるのは面白いと思った。思ったより上手にできた。お母さんが美味しいと言ってくれたので、また作ってみたいと思った。でもその後に洗いた物がめんどくさかった。家事ってめんどうくさいものばかりだ。一日交代してみた、すごくつかれたし、子供に勉強をしないさいつて言うのが大変だった。やっぱり子供の方が楽だなと思った。いつもこんなに大変なことをしているから、ありがたいなあ、と思った。

選者あとがき

あさのあつこ「作家」

それぞれの作品に登場する両親、おじいちゃん、おばあちゃん、どなたも魅力的な人ばかり。私もそんなお母さんやおばあちゃんのようになりたいな、と思いました。子どもたちの大人へ向ける視線はどこまでも真っ直ぐで、読んでいて襟を正す思いでした。家族や地域社会の崩壊など、人と人との繋がりが危ういといわれる昨今ですが、作文を読んで、子どもたちの世代は大丈夫だと安心させてもらいました。

尼子 騷兵衛「漫画家」

みなさんの文章を読んでいて、ひとりひとりの人物が生き生きとしていて、目に浮かぶようでした。その理由は、上手に書こうとしたり、「ありがとう」を言う相手を飾ったりしないからでしょうね。多感な年頃の子どもたちにとって、感謝の言葉を作文にするのも勇気のあることではないかと思いますが、「ありがとう」を贈られた当人の喜びは想像に難くありません。たくさんの素敵な「ありがとう」に出会えて、幸せです。

森田 正光「気象予報士」

日常の出来事をユニークにとらえることで、読み手が思わず読み進めてしまう作品が多かったように感じます。また、身近な人の死など、悲しい出来事を経験しても、

周囲を気遣い、新しい生活に目を向けられる強さを持った子どもたちの心根に感じました。このコンクールは、普段の生活の中ではなかなか気づかない「ありがとう」の気持ちを見つけられる、素敵な機会だと思えます。

鈴木 弘行「シナネン株式会社代表取締役社長」

低学年でも情景を巧みに書く子がいるなど、目を見張る作品が多かったと思います。この「ありがとう」という題で作文を書くにあたって、みなさんの心の中で、いろいろな人への「ありがとう」を改めて感じなおして素直に表現され、本当に感謝している気持ちたちが伝わってきました。まさに、私どもがコンクールに込めた願いの通りです。子どもたちのそんな「気づき」に出会った時、この取り組みの意義を感じます。

下高原 拓「朝日小学生新聞」

今年もよい作品がたくさん集まりました。お互いを思いやる強い絆で結ばれた「いい家族」がこんなにもたくさん、3万以上も私たちの元へ集まってくれました。みなさんの優しい思いにふれることができ、元気をいただきました。

(順不同、敬称略)